渡瀬遺跡

広島県深安郡神辺町道上所在遺跡の調査

1982

広島県教育委員会
財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター

目　次

Ⅰ．はじめに……（1）
Ⅱ．遺跡の位置と環境……（2）
Ⅲ．遺跡の概要……（5）
Ⅳ．遺物……（10）
Ⅴ．まとめ……（33）

例　言

1．本書は，昭和56年度に広島県教育委員会が県土木部から配当替えを受け，(財)広島県埋蔵文化財調査センターが実施した六反田川の改修工事に係る渡瀬遺跡（深安郡神辺町大字道上字渡瀬）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は，(財)広島県埋蔵文化財調査センター調査研究員　松井和幸，沢元保夫，梅本健治があたった。

3．遺構の実測，写真撮影には，松井・沢元があたり，遺物の実測，トレースは松井が，写真撮影は，青山透が行った。

4．本書の執筆，編集は松井が行った。

5．第1図の「渡瀬遺跡周辺遺跡分布図」は，建設省国土地理院発行の50,000分の1地形図(井原）を使用したものである。

Ⅰ はじめに

六反田川は，深安郡神辺町大字西中条地内に源を発し，平野部を通過して一級河川芦田川水系の六間川と合流する河川であるが，現在流域地帯は福山市のベッドタウンとして都市化が進み，宅地の造成が盛んに行われている。ところが，六反田川の川幅は平均約1.5mと狭少で，屈曲部分が多い天井川であるのに護岸設備はほとんどなく，堤防が決壊，氾濫しやすい。このため，流路を規正する目的で，広島県福山土木建築事務所の手によって同河川の改修工事が継続して実施されている。

当該土木工事予定地内に係る渡瀬遺跡は，深安郡神辺町大字道上字渡瀬地内における昭和55年度の六反田川改修工事の際に発見されたもので，同年の神辺町教育委員会による発掘調査の結果，遺構は検出されなかったが，弥生土器，土師器，須恵器等の遺物包含層が確認された。昭和56年6月11日から11月10日までの予定で実施された昭和56年度分の工事では，工事区域がさらに北に延長されるため，工事予定地内への遺跡の広がりが当然予測されたことから，広島県教育委員会の委託を受けた(財)広島県埋蔵文化財調査センターが事前に発掘調査を実施し，記録保存の措置を講じることとなった。なお，発掘調査は河川の増水する梅雨期を避け，昭和56年7月10日から9月11日までの約2か月間にわたって実施した。

なお，発掘調査にあたっては，神辺町教育委員会，神辺町立歴史民俗資料館，草戸千軒町遺跡調査研究所及び地元住民各位の御協力をいただいた。また，出土遺物整理にあたっては，広島大学文学部考古学研究室潮見浩，鈴木康之，神辺町教育委員会佐藤昭嗣，神辺町立歴史民俗資料館佐藤一夫の各氏に多大の指導と協力を受けた。記して謝意を表したい。

発掘風景

Ⅱ 遺跡の位置と環境

中国山地の南斜面を北西から南東に蛇行しながら流れて福山市の西部に至り，瀬戸内海へ注ぐ芦田川は，全長約90km，流域面積約870km²の広島県第２の規模を有する河川である。この芦田川の中流域に開けた神辺平野は，県内でも最大級の平野であり，東西約20km，南北約６kmに細長く延びた盆地を形成している。この神辺平野のほぼ中央部を箱田川が南に流れるが，この箱田川の西方約400mの地点をほぼ箱田川の流路に並行して南流する幅約1.5m程度の小河川が六反田川である。この河川は典型的な天井川であり，亀山遺跡の所在する独立丘陵の東方付近では，水田面との比高約１mである。流域には下池，砂原池など数多くの溜池が散在し，扇状地性低地の特徴をよく示している。

渡瀬遺跡は，この六反田川が狭長な谷部分から扇状地に移行した標高20数メートルの水田地帯から，現在の渡瀬集落の背後の丘陵部一帯にかけて広がっている。この遺跡は，昭和31年11月に松浦弥一氏の所有地を果樹園に造成中，地下1.5mのところから弥生土器や土師器の破片が層をなして出土したことからすでにその存在が知られていた（高垣敏男『神辺町史』前巻 1972年）。

神辺平野は県内でも最も遺跡分布の稠密な地域であり，平野部の周辺域から，南と北に存在する標高100～200mのなだらかな丘陵の縁辺部には，縄文時代後期から歴史時代まで数多くの遺跡が存在する。渡瀬遺跡の存する道上地区に限っても，遺跡地の南方約800mの地点には，弥生時代前期の遺跡として著名な亀山遺跡が所在し，昭和56年の県教育委員会の発掘調査では，旧石器時代・弥生時代前期～後期，古墳時代前半期，平安時代の遺構，遺物が検出されている。また北部の丘陵地帯には，弥生時代中期から古墳時代，奈良時代にかけての的場遺跡など弥生時代から古墳時代にかけての集落跡や古墳の存在が多数知られている。歴史時代に入ると，当地が古代山陽道の縁辺部にあたると推定されることから，南西約600m，現在の道上小学校が位置する丘陵の中腹部には，白鳳時代に創建され，平安時代の後半まで存続した，法隆寺式伽藍配置をとると想定されている中谷廃寺跡が存在し，昭和53年の神辺町教育委員会による発掘調査では，塔跡ならびに講堂跡と考えられる２棟の建物基壇・ピット・溝などが検出されている。

なお，詳細な周辺地域の歴史的環境については，以下の文献を参照されたい。

主 要 参 考 文 献

松崎寿和・潮見浩「広島県亀山遺跡」『日本農耕文化の生成』 1961年

潮見浩「広島県亀山遺跡発掘調査報告」『広島大学文学部紀要』第21号 1962年

福山市史編纂会『福山市史』上巻 1963年

高垣敏男『神辺町史』前巻 1972年

神辺郷土史研究会『弥生時代の神辺』「神辺の歴史と文化」第３号　1975年

神辺郷土史研究会『神辺の古代寺院跡』「神辺の歴史と文化」第７号　1980年

広島県『広島県史』考古編　原始古代　1979年

加藤光臣「深安郡神辺町大宮遺跡の表採資料について」『芸備』第６集　芸備友の会 1978年

広島県教育委員会『神辺御領遺跡第１次発掘調査概報』　1976年

広島県教育委員会・草戸千軒町遺跡調査研究所『神辺御領遺跡第２次発掘調査概報』 1978年

広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター『神辺御領遺跡』―神辺農業協同組合御野支所建設にかかる―　1980年

広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター『神辺御領遺跡』―国鉄井原線建設に係る発掘調査報告―　1981年

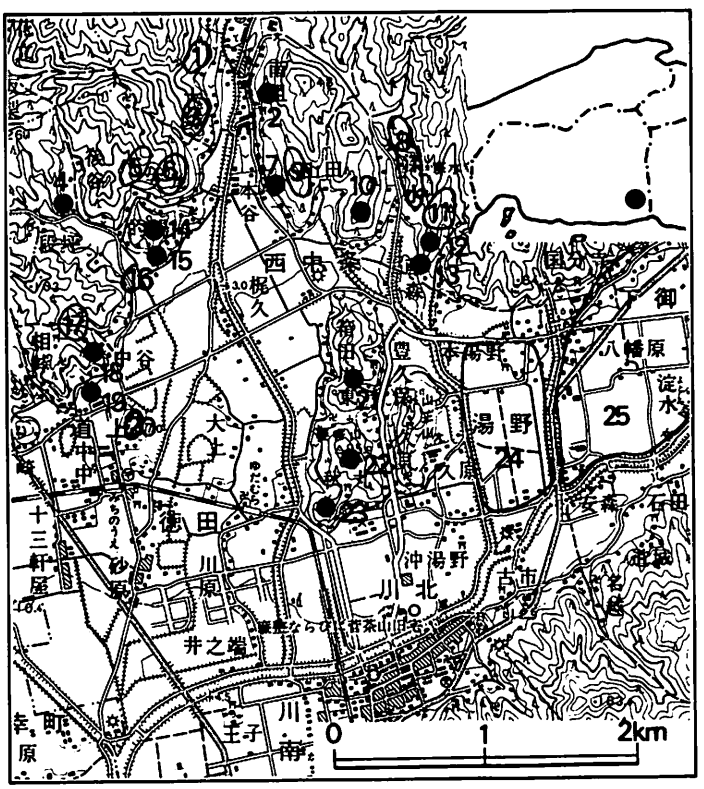
広島県教育委員会『小山池廃寺発掘調査概報』第１～３次　1977，79年

広島県教育委員会『備後国分寺発掘調査概報』第１～４次　1973～76年

神辺町教育委員会『備後中谷廃寺』　1981年

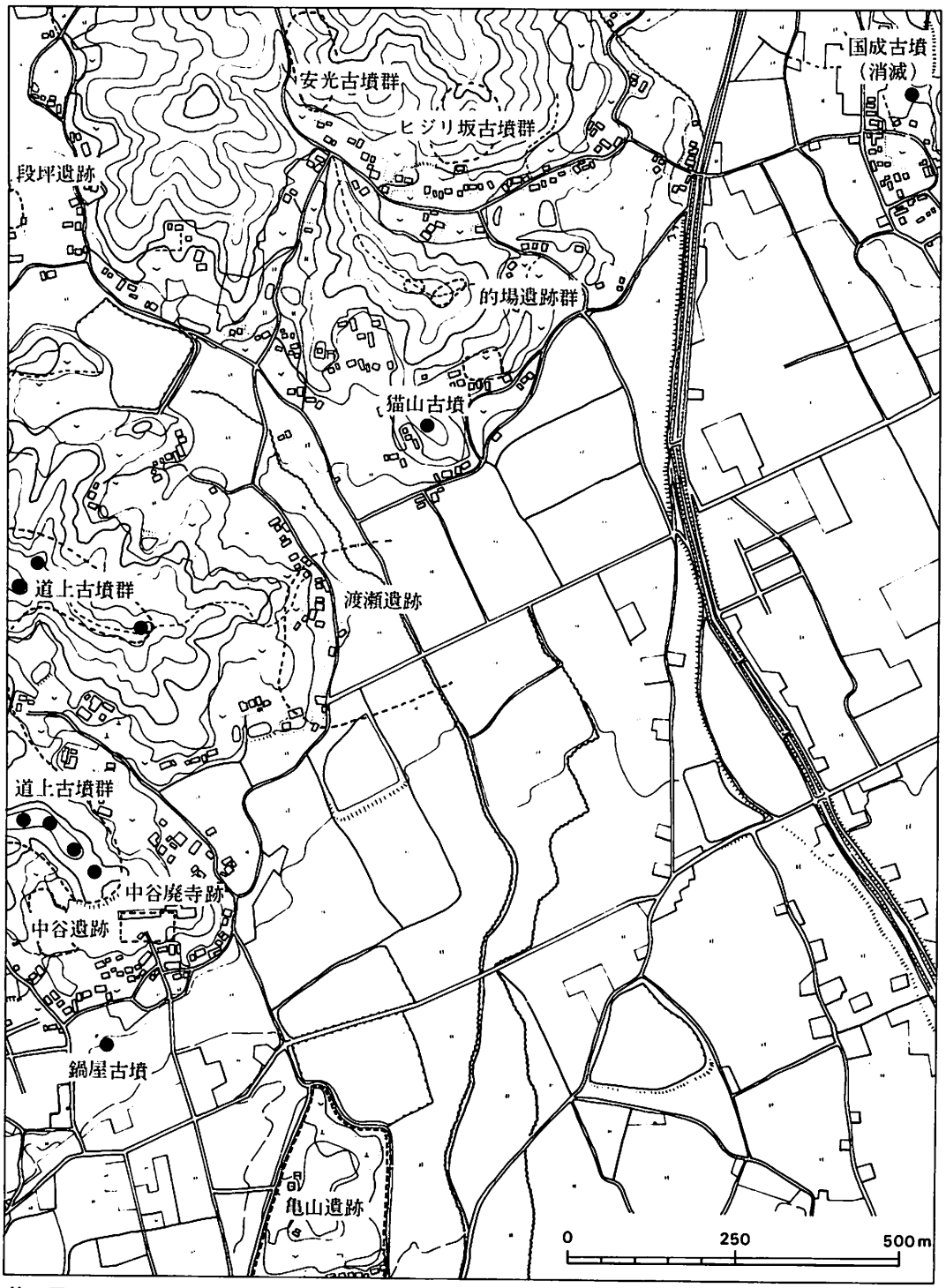
立命館大学人文学会『立命館文学』第427・429号―芦田川流域の空間組織―1981年

広島県教育委員会『大宮遺跡発掘調査概報』第１～４次　1978～81年



1．土井古墳群
2．南組古墳
3．大坊古墳群
4．段坪古墳
5．安光古墳群
6．ヒジリ坂古墳群
7．国成古墳（消滅）
8．深水古墳群
9．本谷古墳群
10．深水西古墳
11．深水東古墳群
12．貝谷古墳
13．貝谷遺跡
14．的場遺跡
15．猫山古墳
16．渡瀬遺跡
17．道上古墳群
18．中谷廃寺
19．鍋屋古墳
20．亀山遺跡
21．中陣遺跡
22．要害山古墳
23．赤地古墳
24．大宮遺跡
25．御領遺跡

第１図　渡瀬遺跡周辺遺跡分布図


国成古墳
（消滅）
安光古墳群
ヒジリ坂古墳群
段坪遺跡
的場遺跡群
猫山古墳
道上古墳群
渡瀬遺跡
道上古墳群
中谷廃寺跡
中谷遺跡
鍋屋古墳
亀山遺跡
0
250
500m

第2図　渡瀬遺跡位置図

Ⅲ 遺跡の概要

当該発掘対象区は，六反田川の流域約2,000㎡であるが，梅雨期後半の降雨による河川の増水も考えられたことから，現在の流路及び堤防部分は調査対象地からはずし右岸の工事区域について発掘調査を行った。調査区には，県福山土木建築事務所作成の1/500地形図のBC 2の杭を基準として5m単位のグリッドを作成し，下流から南北方向に1～21，東西方向にa～dの区画を設定し，b列を中心に5×10mを発掘時の1単位として調査を進めていった。

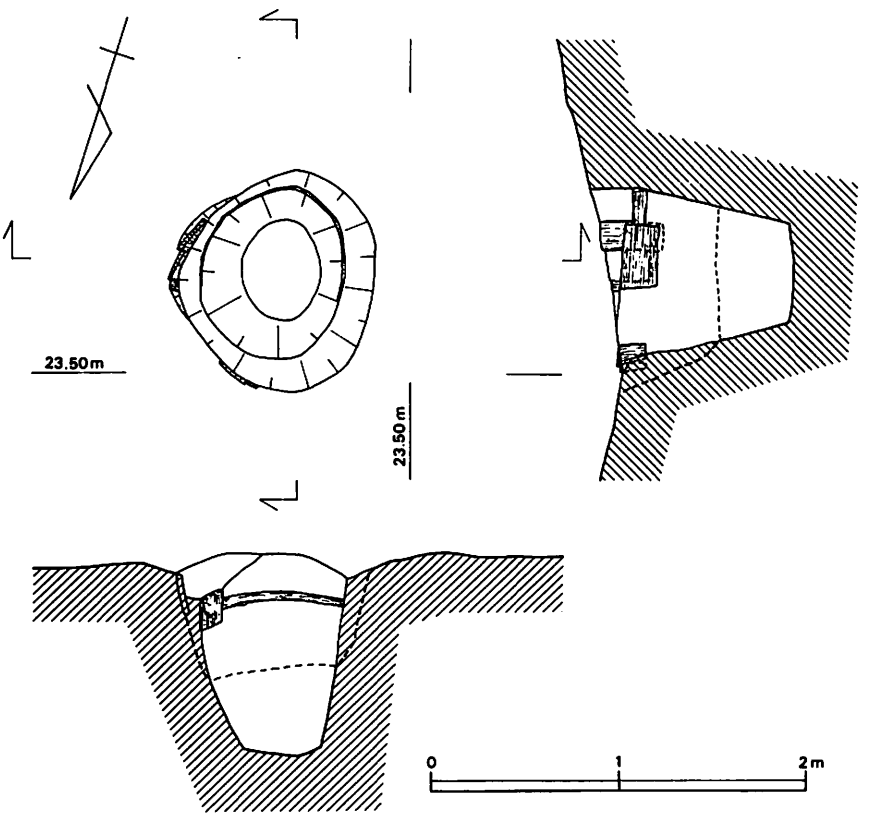
遺跡地はかなり湧水が激しく，側面の壁の崩落が著しいので，遺構検出はもとより，東，西，北の土層図の写真撮影，実測（S＝1/20）も困難な状況であった。また，昭和55年度の神辺町教育委員会による予備調査で包含層にかなり時期的な乱れがあることが確認されていたため，調査は遺物の出土状態の確認を主目的として行うこととした。なお，平均して40～50cm程度堆積していた水田の耕作土は，ユンボによって排土した。

土層　河川の堆積土のためかなり細かな堆積土の相違がみられるが，基本的には第Ⅰ層ー褐色砂質土層（耕作土），第Ⅱ層ー暗黄褐色砂質土層，第Ⅲ層ー黒褐色砂質土層，第Ⅳ層ー黒色粘土層，第Ⅴ層ー青灰色粘土層の5層に大きく分けられる。なお，第Ⅴ層の青灰色粘土層の下に褐色砂層があり，伏流水の流路となっている。第Ⅰ層の下には，数cmの厚さで，鉄分を含んだ硬い黄褐色砂質土層の堆積が認められた。遺物は第Ⅱ～Ⅲ層までに含まれているが，第Ⅲ層の黒褐色砂質土層中には特に多く，この層が本来の遺物包含層を形成しているものと考えられる。ただ，この包含層も単一時期に形成されたものではなく，各時期の遺物が混在して出土した。第Ⅳ層及び第Ⅴ層にはほとんど遺物を含んでおらず，第Ⅳ層の黒色粘土層の上面はかなり起伏に富んでおり，こうしたところにできた小穴や溝状の落ち込みの中に集中して遺物が出土するといった状況がうかがえた。なお，第Ⅲ層の黒褐色砂質土層は，6b，7b区あたりから上流に向かうにしたがって灰色砂層，青灰色砂層などの砂層に変化してゆき，中に含まれる遺物も，下流のものが弥生時代，古墳時代を中心とするものから，上流に向かうにしたがって平安時代のものが中心に出土した。

遺構　明確な遺構としては，第3図に示す井戸が10b区で1基検出されたのみである。径1.1～1.2mのやや楕円形の掘方に，幅20cm，厚さ1cm程度の板を垂直にたててまわりにあて，井戸の縦板とし，その中に径80cm程度の曲物の井筒を裾えている。曲物は，南側半分に1段のみ残存し，それも上部は腐蝕のため欠失している。この井戸は，黒色粘土層を掘込んでつくられており，その下層の青色粘土層に達している。現状での深さは約1mである。なお，この時期は井戸内に出土遺物がないため不明であるが，周辺から平安時代の土師器の坏類が集中して出土していることからほぼこの頃のものと考えられる。この他11b区と12b区の境で，同じく黒色粘土層に掘込んだ，径約1m，深さ約30cmの円形の土坑を1基検出したが，井戸枠のようなものも検出されず，井戸と確認するまでには至らなかった。中からは，平安時代の土師器が集

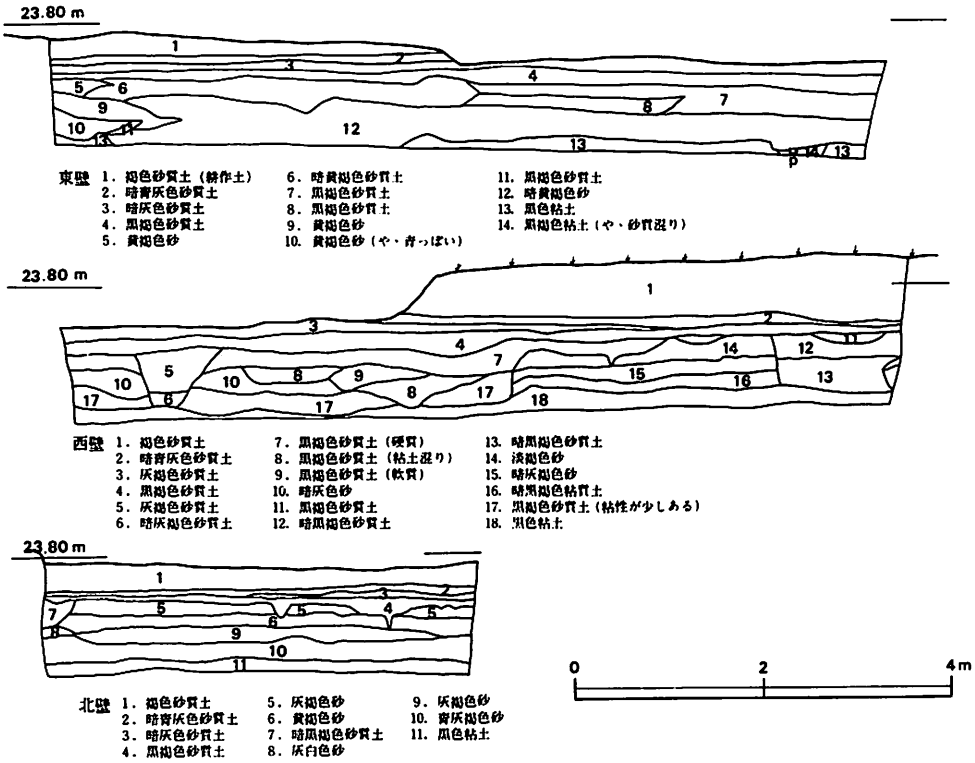
中して出土した。

この他，調査域外ではあったが，工事中に12 a 区の第Ⅴ層青灰色粘土層の下の褐色砂層上部から，伏流水に洗い流されたような状況で，第９図に示す木製品が出土した。周辺域からは，弥生時代後期の土器，樽形須恵器，須恵器坏，土師器坏など各時期の土器が出土しており，これら木製品の厳密な年代は確定しがたい。なお，現在の六反田川の堤防の下に，垂直に立った木杭が多数確認されることと，これらの木杭に絡んだ状態で木の枝などが集中して認められる部分があることなどから，この12 a 区付近から六反田川の川底下にかけて，柵（しがらみ）ないしは堰状の構築物の存在が推定された。しかしながら，台風の時期でもあり，十分な安全対策を講じることができないため，発掘調査を断念せざるをえなかった。

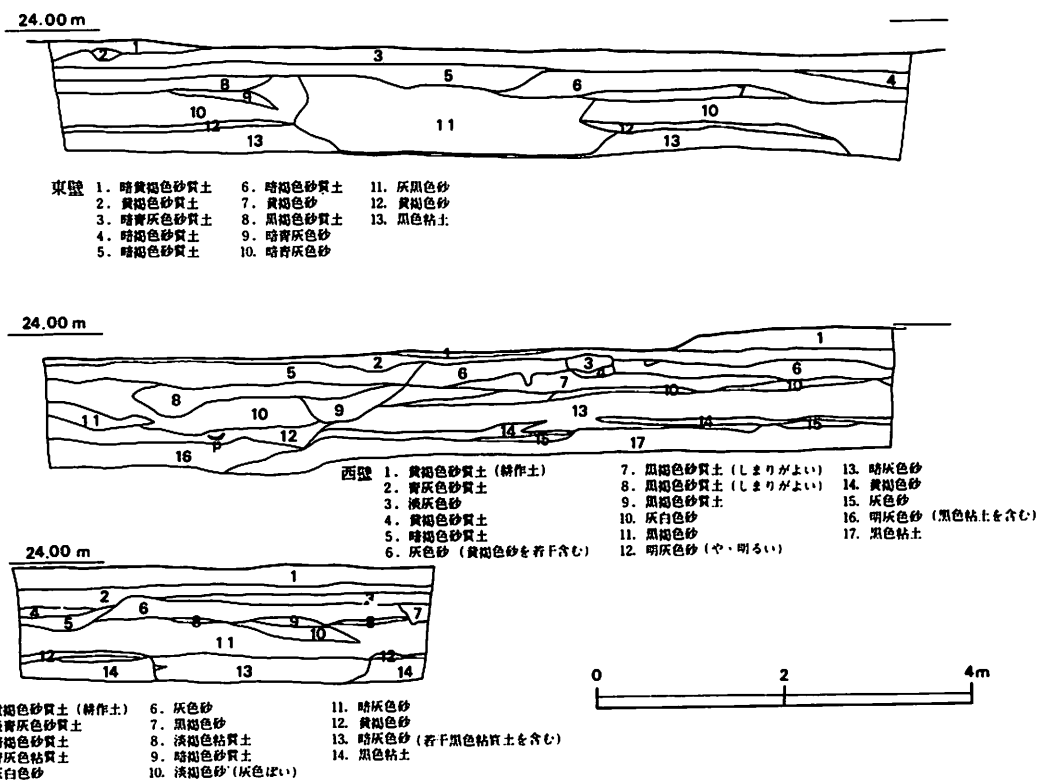


第３図　井戸実測図

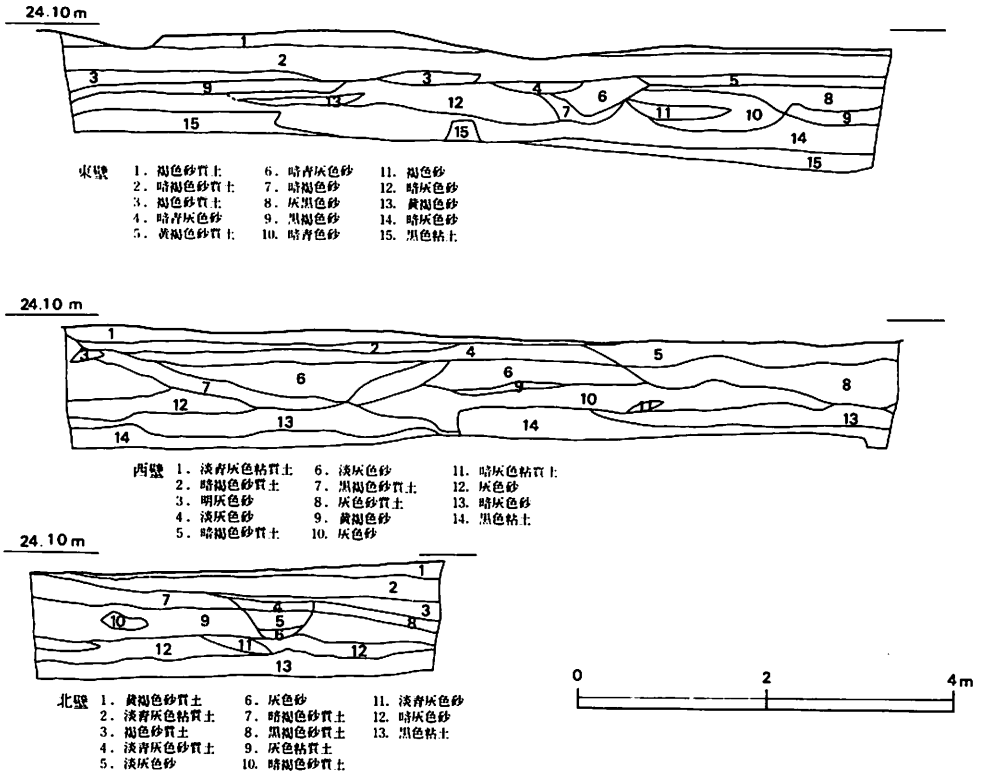
第４図　渡瀬遺跡発掘区（斜線＝神辺町教育委員会調査区，アミ目＝今回調査区，破線＝工事区域）



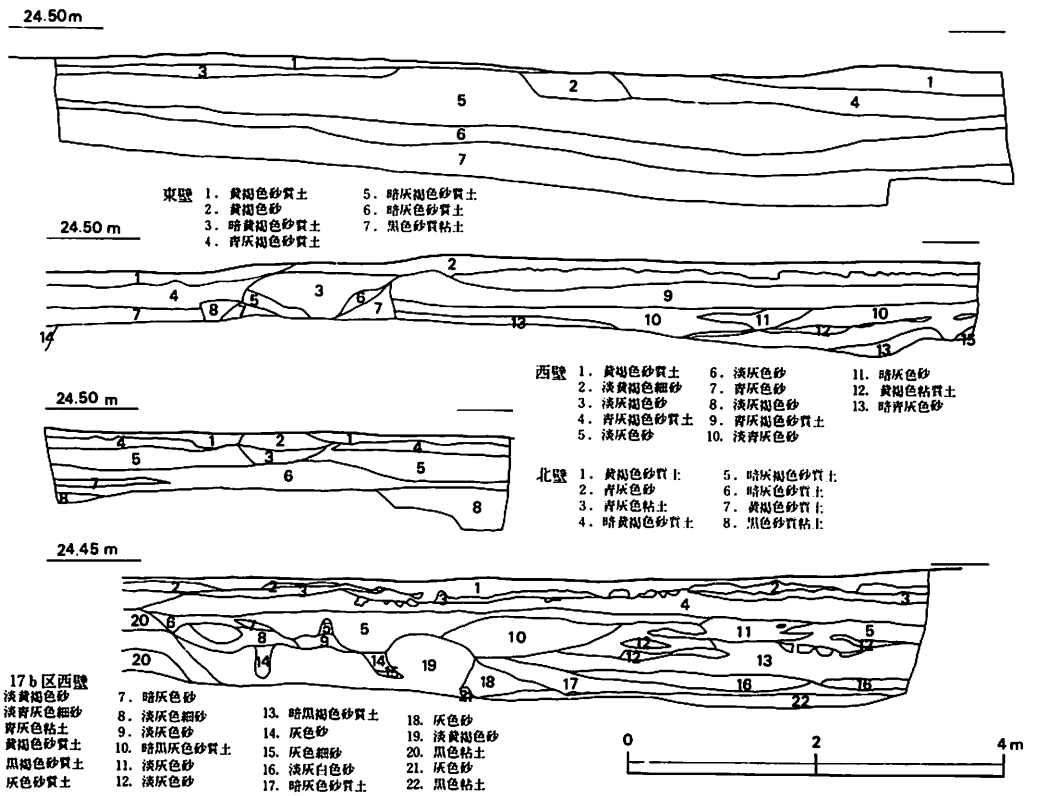
第5図　2ｂ，3ｂ区土層図



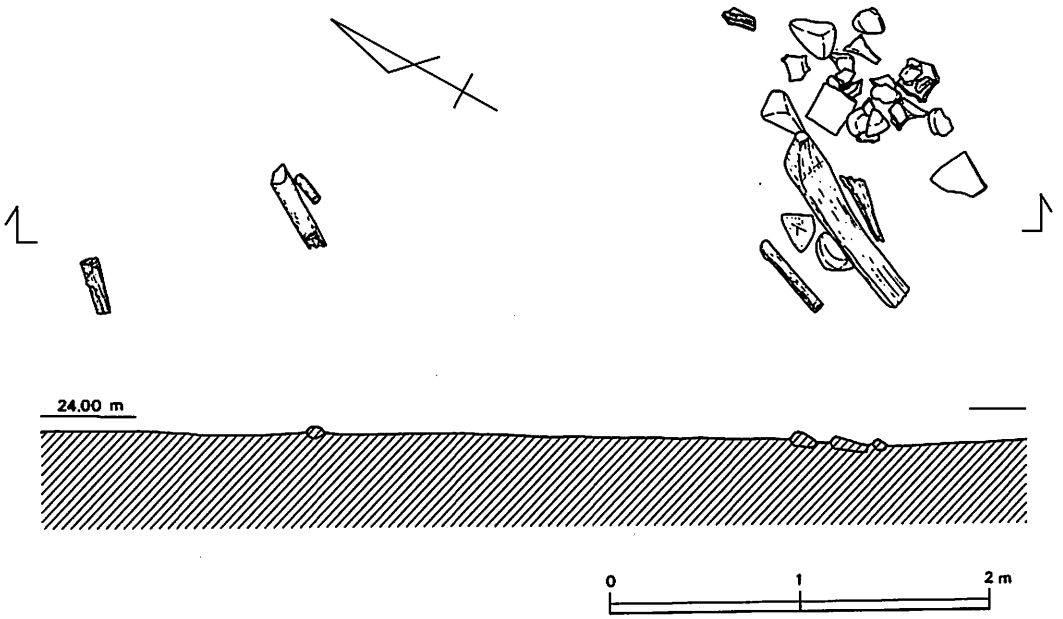
第6図　6ｂ，7ｂ区土層図



第7図　8 b，9 b区土層図



第8図　12 b，13 b区，16，17 b区西壁土層図



第9図　12d区木器出土状況

Ⅳ 遺　　物

出土遺物には，土器，石器，木製品がある。いずれも包含層からの出土であり，層位的に乱れがあるため，時期，器種ごとのセット関係など不明瞭な部分もあるが，以下各時期ごとに順を追って記述したい。

1　弥生土器

甕形土器（8，11～13）

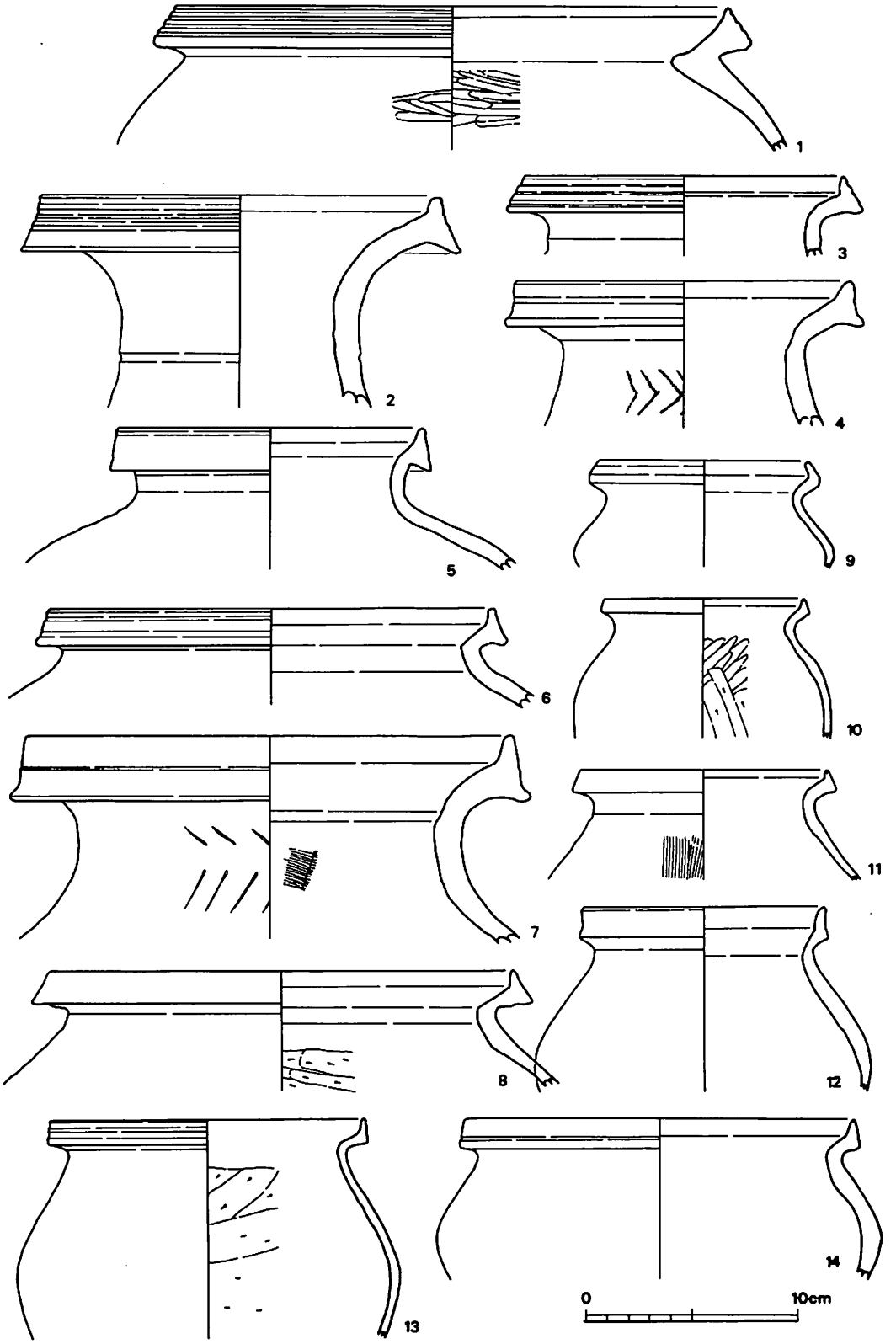
8のように口径24cm程度の大形のものと，11，12のように口径12，3cm内外の2種類のタイプがある。いずれも内外面は磨耗しており，表面の調整痕は不明瞭の部分が多いが，8，13は頸部内面まで縦方向のヘラケズリ，11の外面は縦方向の刷毛目調整を施す。口縁端部はやや内傾させて上方に拡張したもの（8，11，13）と，ほぼ垂直に立ち上がるもの（12）の2種類があり，11，13は内面に明瞭な稜線をもつ。なお，13は口縁外部に2条の浅い凹線をほどこしている。

壺形土器（1～7，9，10，14～27）

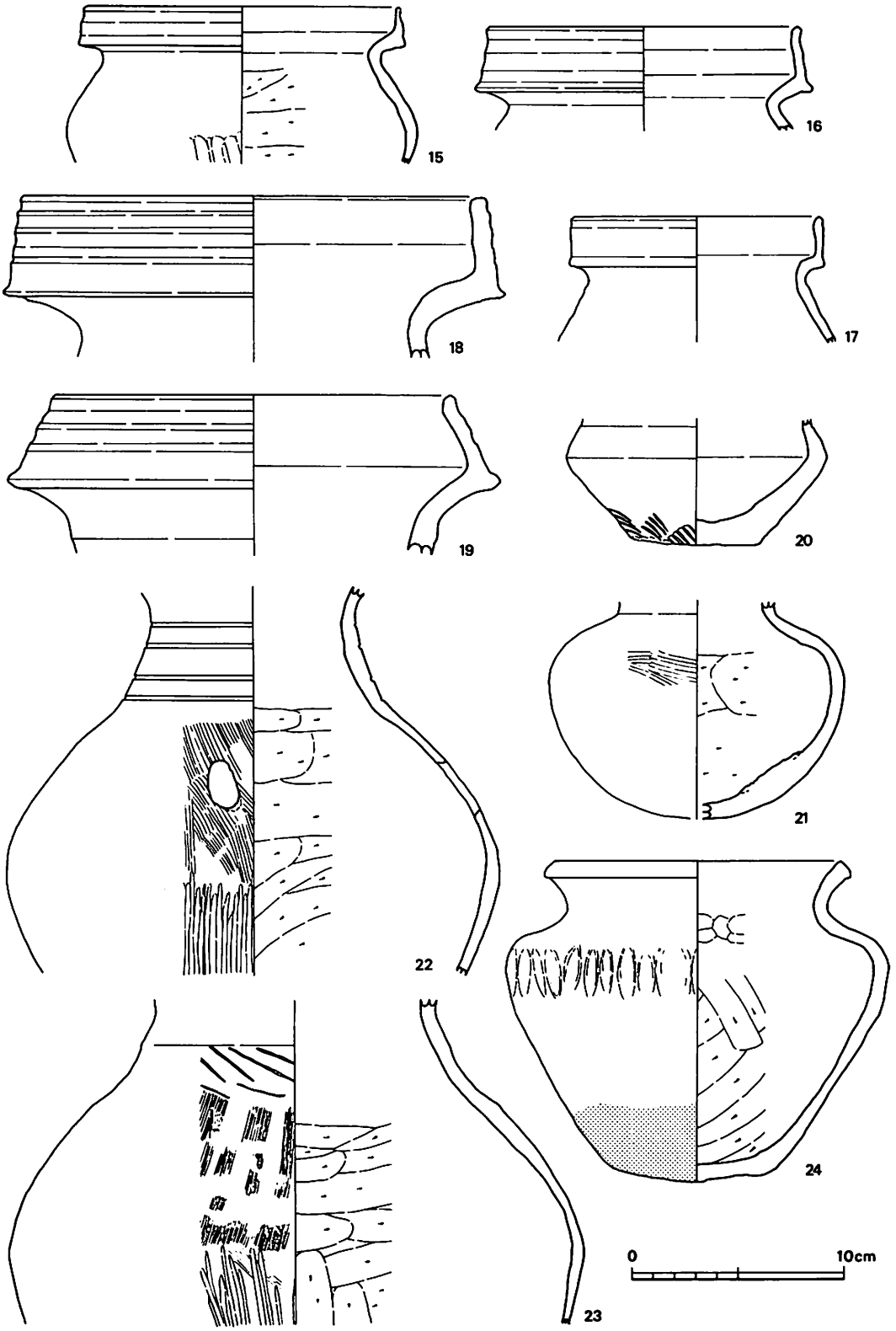
a類（2，4，7，22，23，25）頸部が長く立ち上がるものをa類とした。この中には，25のように肩部が比較的明瞭なものと，22，23のように頸部からなだらかな傾斜をもって胴部に至る2種類の器形が含まれる。口縁端部はやや内傾させ，上下に拡張し，そこに数条の凹線をほどこす。頸部外面には，凹線を施すもの（2，22），ヘラ先による列点文を施すもの（7），クシ歯状の工具による綾杉状の列点文を施すもの（4），同じくクシ歯状の工具による「ノ」の字状文を施すもの(25)など種々がある。外面調整は，25のように内外面ともかなり粗い刷毛目調整を施すものと，22，23のようにかなり細かい刷毛目を施すものがある。なお，22，23は胴下半部は縦方向のヘラミガキ調整である。内面調整は，頸部内面まで横方向のヘラケズリ調整を施す（22，23，25）。

b類（5，26，27）頸部が短く立ち上がるものをb類とした。口縁端部は，ほぼ垂直に上下に拡張して立ち上がり，外面には両端に半載竹管状の工具による押し引き状の手法による浅い凹線を残す（26）。なお，口縁端部の下方への拡張は，a類よりも強い。5は，内外面が磨耗しており全体の調整は不明瞭である。26の外面調整は，下胴部が縦方向のヘラミガキ，上胴部が横方向のヘラミガキで，頸部には縦方向の刷毛目痕を残す。内面調整は，胴上部まではヘラケズリ調整で，肩部内面には縦方向の刷毛目調整を施している。27の外面調整は，横方向の叩きの後，縦方向の刷毛目調整を行い，内面は下胴部が縦方向のヘラケズリ，上胴部が細かい縦の刷毛目調整である。なお，27は肩部が下がり，頸部も比較的長いことから，a類との中間形態ともいえよう。

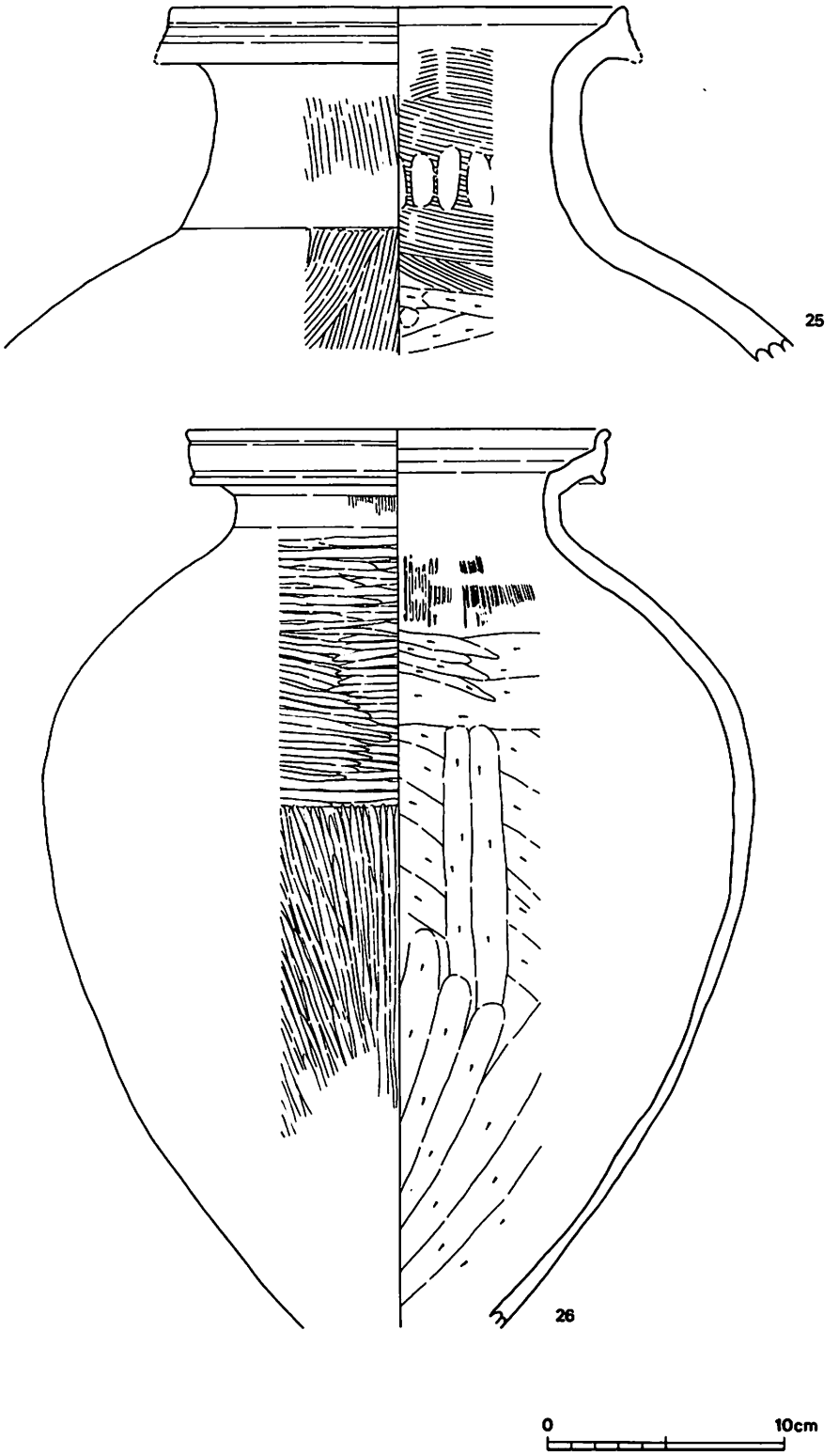
c類（1，6）―口縁部が頸部から「く」の字状に折れて開くものをc類とした。1は，内



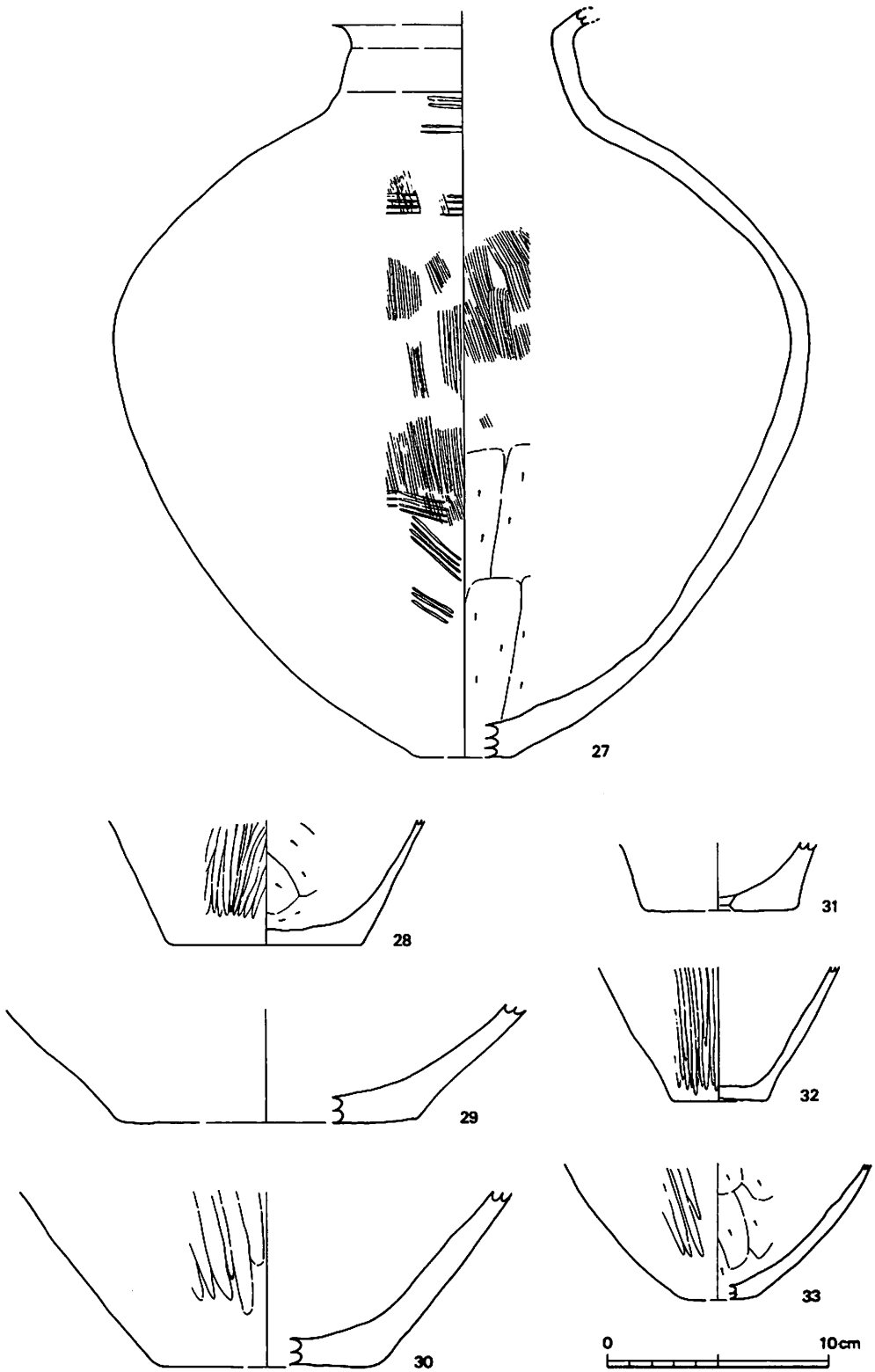
第10図　出土弥生土器1



第11図　出土弥生土器2



第12図　出土弥生土器３



第13図　出土弥生土器4

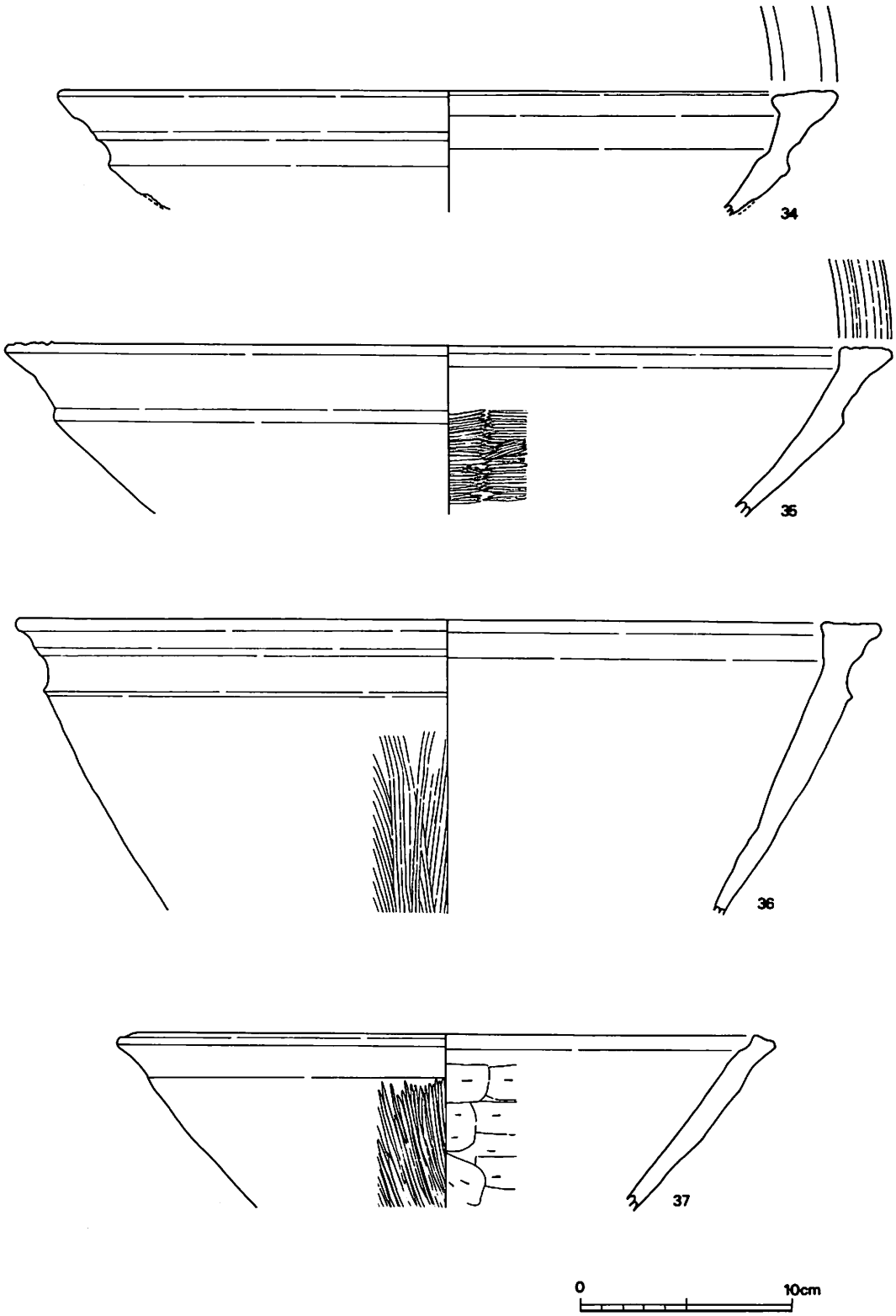
外面とも横方向のヘラミガキ調整を施し，全体の調整は非常に丁寧である。口縁端部はゆるやかな曲線をもって上方に肥厚し，外面には4本の凹線をめぐらす。6は，口縁端部がやや内傾して立ち上がり，上下に拡張する。口縁外面には，浅い痕跡程度の凹線を2条めぐらす。

d類（9，10，14～19）　口縁部が頸部からゆるやかな曲線をもって開くものをd類とした。この中には，口径10cm程度の小形のもの（9，10，17）と，15～18cm程度の中形のもの（14～16）と，24cm内外の大形のもの（18，19）の3種類のタイプがある。また，口縁が短かく上方に立ち上がるもの（9，10，14）と，逆L字状に明瞭な稜をもって長く上方に立ち上がるもの（15～19）の2種類がある。口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施し，外面には，痕跡程度に凹線を残すものもある（14～16，18，19）。

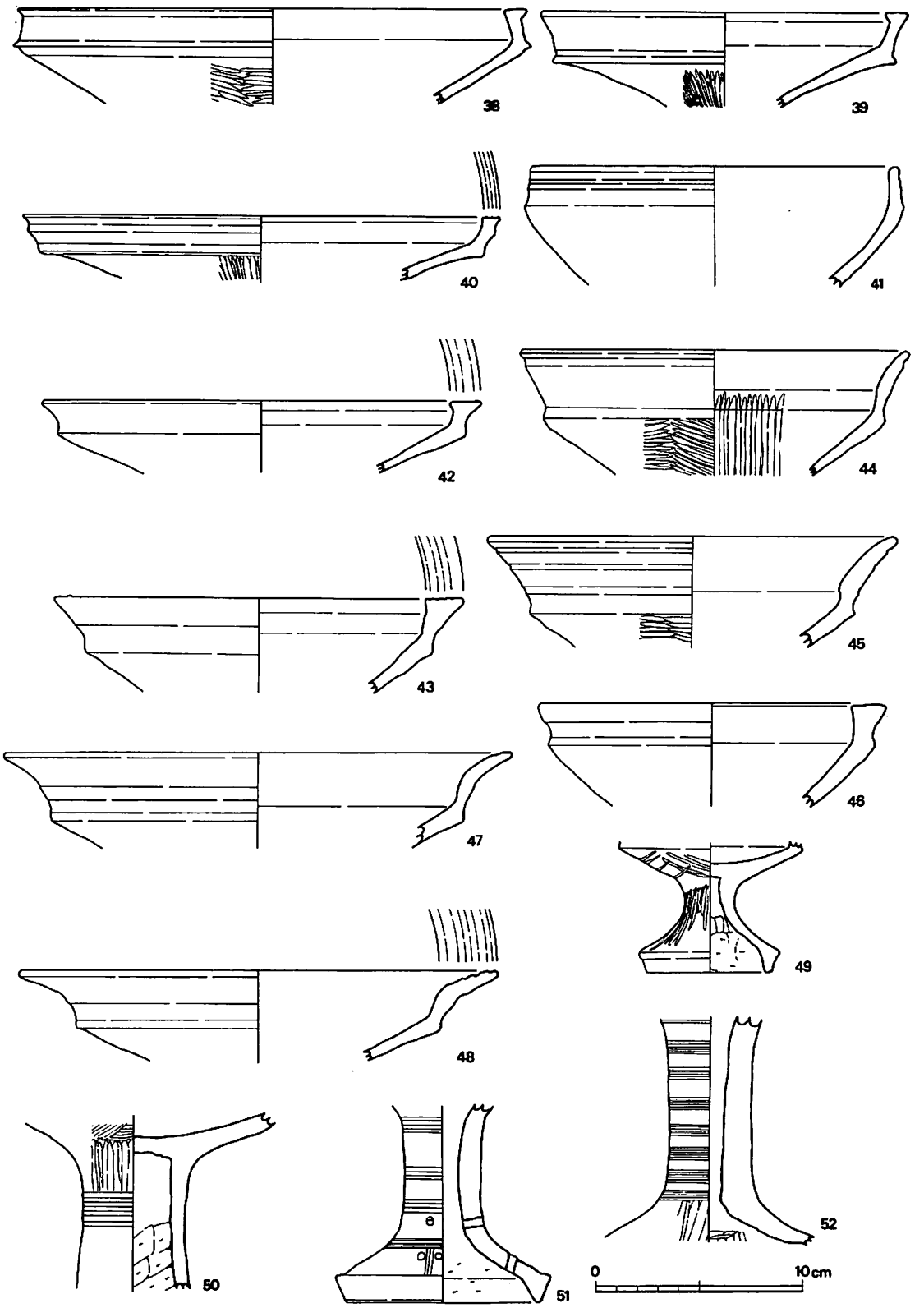
e類（20，21，24）　その他の壺形土器をe類とした。20は，内外面とも磨耗しており表面調整は不明の部分が多いが，下胴部に叩き目調整を施している。内面はヘラ先状のものによる抉り込みによって削っており，器壁はかなり厚い。21は，直口の小形壺形土器になるものと推定される。胴部はほぼ球形であり，外面がやや粗い横方向の刷毛目，内面がヘラケズリ調整を施している。現状では弥生土器か，土師器かの識別はつけ難いが，土師器の可能性の方がより強い。24は，短く「く」字状に開いた口縁部から肩が強く張って平底の底部に至るという特異な器形をしている。口縁端部はわずかに下方に拡張する。外面調整は不明瞭であるが，ナデによっているものと推察できる。なお，肩部には指頭状のものによるナデつけ痕があり，頸部には指によるしぼり状の痕跡が一部残っている。なお，内面は肩部までヘラケズリ調整を行っている。

鉢形土器（34～37，63）

口径40cm内外の大形のもの（34～36）と，30cm以下の小形のもの（37，63）の2種類のタイプがある。34～36は肩部に相当する部分に明瞭な稜をもち，頸部に相当する部分がくびれ，口縁部に至る器形をとる。口唇部は左右に肥厚し，平坦面をつくり出し，そこに数条の浅い凹線がめぐる例もある（35）。表面調整は，34が内外面とも非常に丁寧なヨコナデ，35は内面が横方向のヘラミガキ，36は内面がヘラケズリ，外面が粗い縦方向の刷毛目である。37も器体の全体の形状は34～36と似ているが，肩部に相当する部分の稜は不明瞭となり，口縁部の左右への肥厚もみられない。口縁内面はやゝ凹んでおり，口縁部の左右への肥厚の痕跡を残している。表面の調整は，外面が縦のヘラミガキ，内面が横方向のヘラケズリで，全体に丁寧である。63はこれらの鉢類とやや器形の異なるものであるが，全体の形状は34～37のような鉢類の器形を継承していったものであろう。肩部に相当する部分には稜をもち，ややくびれて口縁部に至る器形をとり，口唇部は肥厚せず丸くなっている。口縁内面はやや肥厚し，口縁部全体がく字状に外反しているかのような様相を呈している。器壁が薄いわりには，底部のつくりは厚い。内外面とも磨耗しており，表面の調整は不明であるが，一部赤変していることから，かなりの加熱を受けていたと推定される。



第14図　出土弥生土器5



第15図　出土弥生土器6

高坏形土器（38～52）

坏部の形態により，口縁部が「く」字状に内側に折れてほぼ垂直に立ち上がるもの－a類（38～40，42，43，46），漏斗状に外側へ開くもの－b類(44，45，47，48)，椀形のもの－c類(41)の3種類がある。

a類（38～40，42，43，46）　38は口縁部は内傾ぎみに折れ，端部は外側へ肥厚し，平坦面をつくり出している。口縁部の曲折部には凸帯状の張り出しがみられる。外面調整は横方向のヘラミガキを行っており，全体に非常に丁寧なつくりである。39も38とほぼ同様な形態をしているが，口縁端部は内側に肥厚しており，内外面ともに赤色顔料の塗布が認められる。40，42，43，46は，口縁部の折れはいくぶん弱くなり，曲折部もやや丸味を帯びている。口縁端部は全体に肥厚し，やや厚みがあり，口唇部の平坦面には浅い数条の凹線がめぐるものもある（40 42，43）。

b類（44，45，47，48）口縁部がゆるく折れて漏斗状に外側へ開く形態のものである。口縁端部はいずれも先細りになり，口唇部は丸味を帯びている。48のように口縁部内側に浅い凹線をめぐらす例もある。なお，47，48は曲折部からいくぶん垂直な立ち上がりをみせ，外側へ折れている。内外面とも調整は不明瞭であるが，44のように内外面ともヘラミガキのものと，45のように外面は横方向のヘラミガキ，内面はヨコナデ調整を施すものがある。

c類（41）椀形の坏部を有するもので，口縁部はやや内傾ぎみにゆるく折れ曲がる。口縁端部は先細りになり，口唇部は丸味を帯びている。口縁部外側には浅い凹線が数条めぐる。内外面ともヨコナデ調整を施し，比較的丁寧なつくりである。

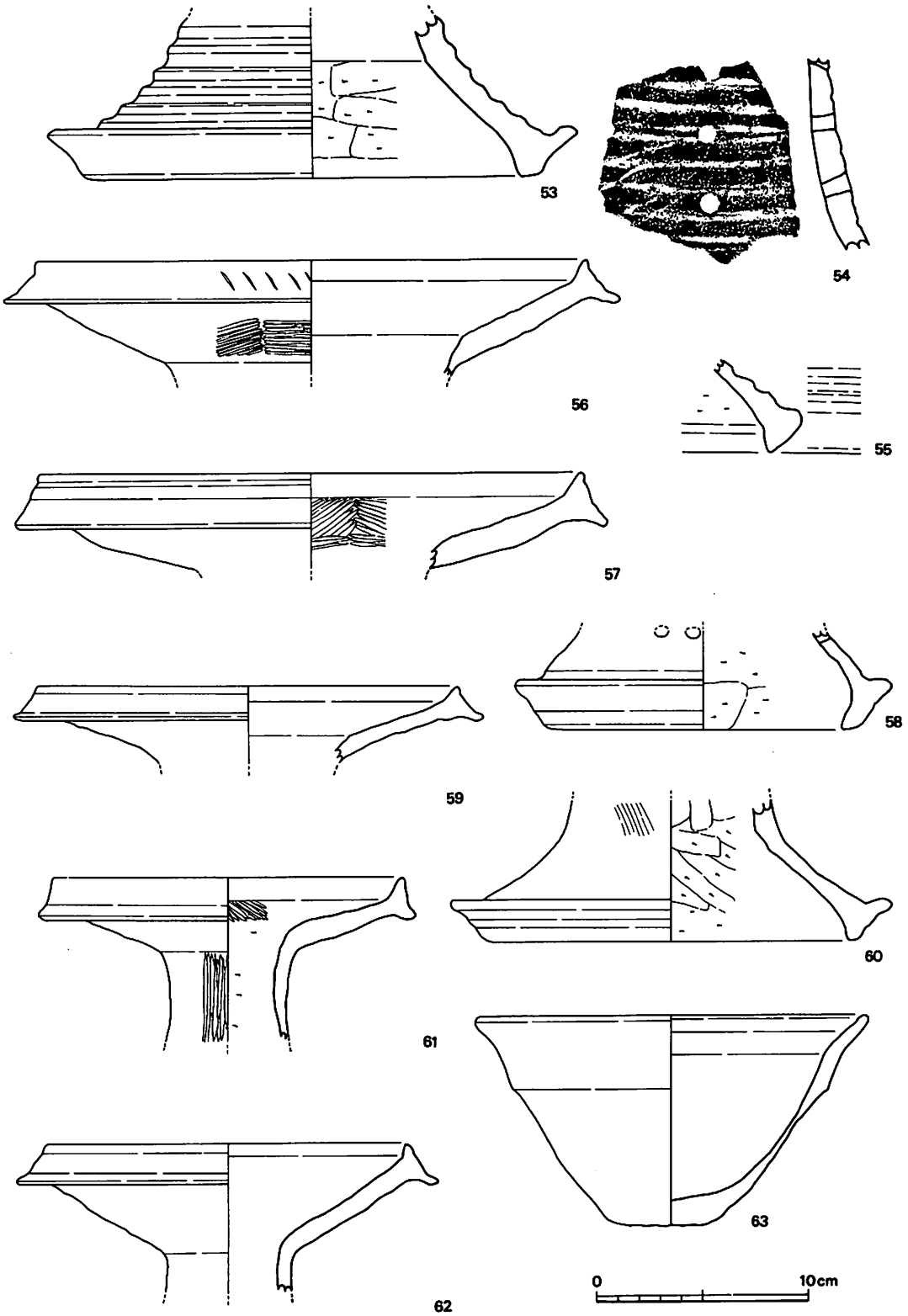
高坏脚部（49～52）49は小形高坏形土器である。脚端部はやや内側に折れ曲がり，曲折部には凸帯状に隆起が認められる。坏部内面はナデ，脚部内面はヘラケズリ，外部はヘラミガキ調整を行っており，全体の調整は良好である。50～52は，いずれも脚部に数条の凹線帯がめぐるものである。概してつくりは丁寧である。

器台形土器（53～62）

53～55，58，60は脚台部の破片であり，56，57，59，61，62は上台部の破片である。

脚台部には，53のように径25cm内外の大形のものと，58，60のように20cm内外の小形のものとがあり，大形のものは器壁が厚く，小形のものは薄いつくりになっている。53は外面に竹管状の工具による押し引き状の凹線をめぐらしており，内面は横方向のヘラケズリ調整を行っている。54，55もほぼ同様な凹線をめぐらしている。58，60は内面ヘラケズリ，外面ヨコナデ調整を施すもので，60は一部縦方向の刷毛目が残っていることから，刷毛目調整の後ヨコナデ調整を行ったものと考えられる。53，58，60の脚端部は上下に大きく張り出し，平坦面はいくぶん内湾しており，60のように浅い凹線のめぐる例もある。

上台部にも56，57のように口経30cm程度で大形の厚手のつくりのものと，59，61のように20cm内外で小形の薄手のつくりのものの2種類がある。56，57は口縁端部が大きく上下に張り出

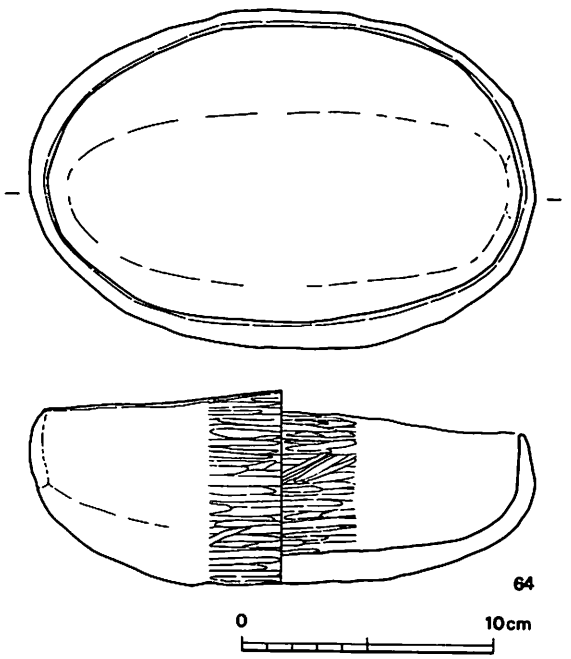


第16図　出土弥生土器7

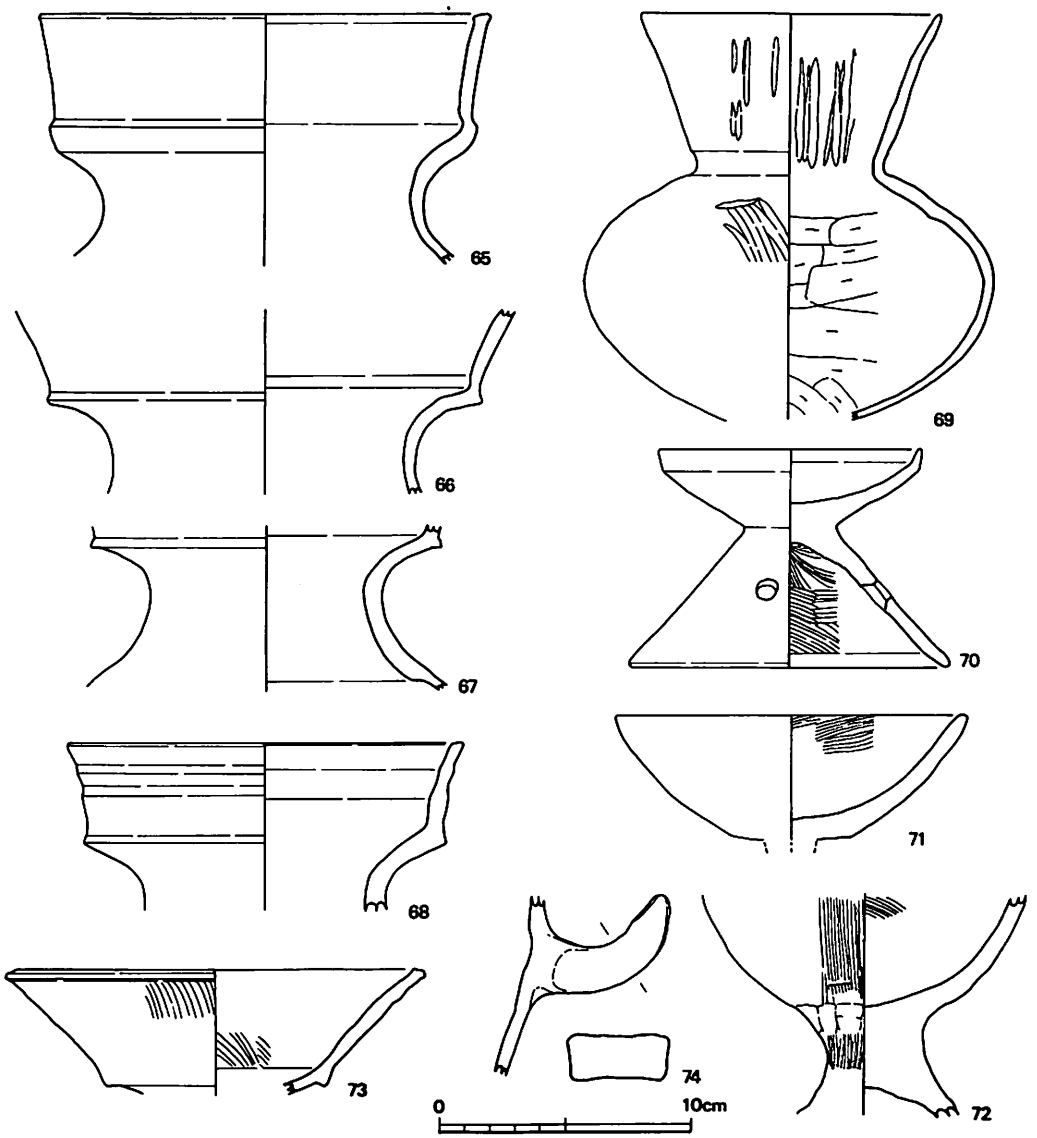
し，口唇外面には凹線状の平坦面をつくり出している。56はその平坦面にヘラ先状の工具による連続「ノ」字状文をめぐらしている。いずれも内面は横方向のヘラミガキ調整を行っており，外面は56は横方向のヘラミガキ，57はヨコナデ調整を行っており，全体に丁寧なつくりである。小形の59，61，62も口縁端部の上，下への張り出しはかなり大きく，56，57同様に口唇部外面には凹線状の平坦面をつくっている。いずれも上端部で6cm内外の比較的細い脚がつき，脚台部付近で急激に外側へ広がってゆく。おそらく図60程度の大きさの脚台部がつくものと推定できる。なお，内面の調整が判明するのは61のみであるが，他の場合も同様に，脚内面はヘラケズリの手法によっているものと考えられる。脚部の外面調整は，61は縦方向のヘラミガキ，59はヨコナデである。全体のつくりは，56，57同様比較的丁寧である。なお，これらの器台形土器に共通しているのは，脚部への曲折部がいずれもかなり薄いことである。このことから，製作の後半段階で，脚内面をえぐるようにヘラケズリを行い，器壁の厚さを調整していることがうかがわれる。

舟形鉢形土器（64）

鉢形土器の一変種であるが，形態が舟底に類似しているためこの名称を与えた。口径最大19cm，最小12cm，胴部最大径20×13.5cm，高さ7.7cmを測り，口縁部はゆるく「く」字状に内側にやゝ湾曲気味に折れ曲がる。口唇部先端は先細りになり，やや丸くなっている。底部は丸味を帯びた平底であり，両端がいくぶん上方に反っている。内面も同様につくっているが，両端には不明瞭ながら抉り込みの稜線が認められる。表面調整は内外面ともやや粗いが，丁寧なヘラミガキであり，長軸方向に沿って行っている。全体に口縁部のゆがみもひどく，粗雑なつくりである。内面には赤色顔料の塗布が認められ，何らかの祭祀用品として用いられたものと推定される。なお，この種の土器は弥生時代木器に存在する舟形鉢を意識して形成されたものと考えられ，同種木器の多くの場合，加工痕が木目方向に沿って認められ，この土器のヘラミガキが長軸方向に沿って行われていることと共通している。



第17図　出土弥生土器8



第18図　出土土師器１

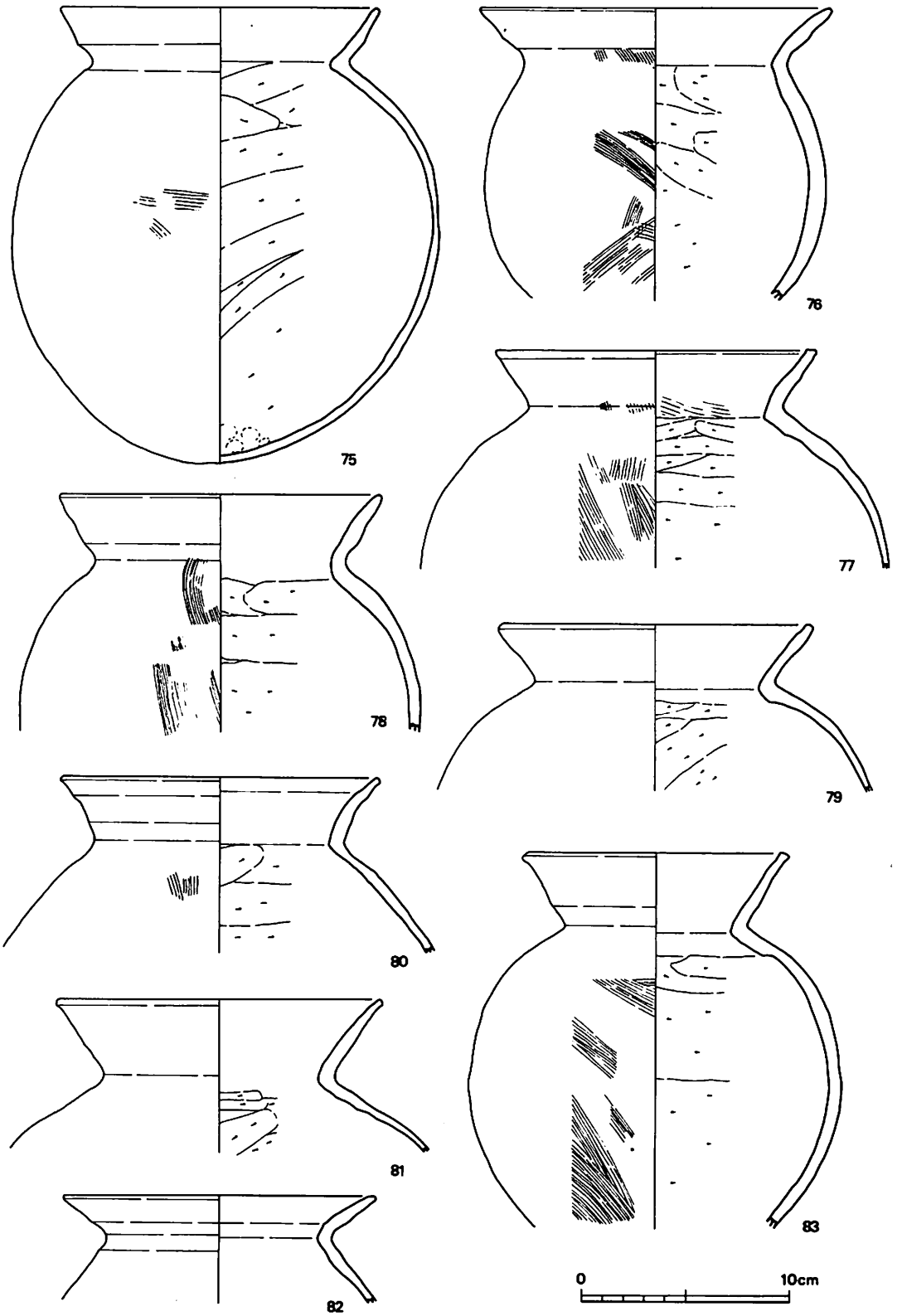
２　土師器

壺形土器（65～68）

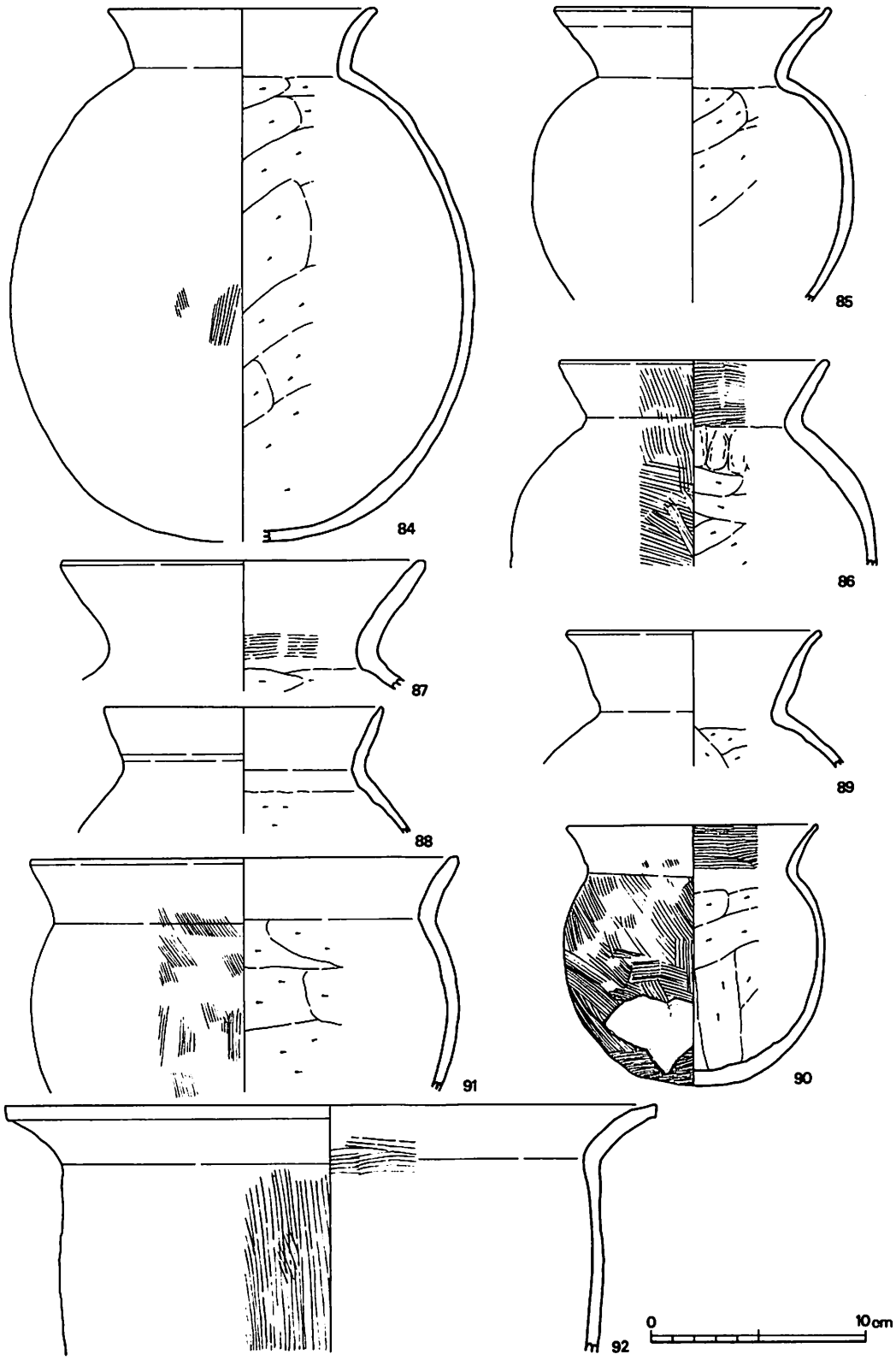
65，66のように口径20cm内外の大形のものと，67，68のように口径15cm内外の小形のものの２種類がある。口縁部は頸部からゆるく「く」字状に折れ曲がり，外反する。口縁外部には，68のように浅い凹線のめぐる例もある。いずれも全体の調整はヨコナデであり，非常に丁寧なつくりである。

小形壺形土器（69）

ほぼ球形の胴部に，漏斗状に開く直口縁をもつ壺形土器である。器壁はかなり薄く，表面調



第19図　出土土師器2



第20図　出土土師器3

整は，胴部内面はヘラケズリ，外面はヘラミガキの後ヨコナデを行っており，全体に非常に丁寧なつくりである。

小形器台形土器（70）

口径10.5cmの小形の皿状の上台部に，大きく開く円錐形の下脚部を有する器台形土器である。脚部には孔があり，全体の数は不明であるが，本来は4孔あったものと推定される。脚内面は，刷毛目，外面及び上台部内面はナデ，ヨコナデ調整を行っており，胎土は精緻，焼成は良好であり，全体にかなり丁寧なつくりである。

高坏形土器（71～73）

72は，椀形の坏部にやや分厚いつくりの脚部のつくものである。外面調整は縦方向の刷毛目であり，坏部と脚部の接合部にはヘラ先状の工具による押しあて痕がめぐる。71も同様に椀形の坏部のつく例であるが，脚部の径は72に比べ小さくなると推定される。73は，口縁部が「く」字状に大きく外反して折れる坏部のつく例である。口縁端部はわずかに内外に張り出し，口唇部に平坦面をつくり出している。器表面は，縦方向のやや粗い刷毛目調整の後，ヨコナデ調整を行っており，非常に丁寧なつくりである。

把手（74）

コブ状の把手で体部を欠く。淡褐色を呈し，胎土は精緻，焼成は良好である。器壁との接合は張り付けによっている。甑の把手と考えられる。

甕形土器（75～92）

a類（75～89）　球形，卵形の胴部に「く」の字状に折れて外反する口縁部のつくものをa類とした。83，85のように頸部の直径が小さく，口縁部が長く張り出すものは，本来壺形土器として分類されるが，外面に煤が付着しており，甕としての使用が考えられることから甕形土器として分類した。75は，ほぼ球形に近い卵形の胴部に，「く」の字状に折れて外反する口縁部がつき，口縁部のくびれ部上方には明瞭な稜線が認められる。こうした口縁外部の稜線は，76，78，80，82，83などにもみられる。内面は，頸部内面まで横方向のヘラケズリ，外面は刷毛目の後ナデ調整を行ない刷毛目を消している。なお，底部内面にはあて具の痕跡が残り，整形の最終段階で底部を丸くつき出していることがうかがわれる。76～78，83もほぼ同様な製作手法をもつ土器類であるが，外面の刷毛目調整痕はかなり残存している。一方，86は内外面とも刷毛目調整痕が明瞭に残っており，他の甕類と異なり刷毛目調整の後のナデ調整は行われていない。口縁端部は，75，76，78のようにやや先細り気味に丸く終わるものと，77，79，83のように肥厚気味に終わるものとの2種類がある。なお，84はこれらの甕類に比べ，やや形態の特異な土器である。卵形の胴部に反り気味に外反する口縁部がつくものであり，器内面は頸部まで横方向のヘラケズリ，外面は縦方向の刷毛目の後ヨコナデ調整により刷毛目痕を丁寧に消している。

b類（90）　小形の甕形土器をb類とした。90は口径12cm，高さ12cmを測り，ほぼ球形の胴

部に「く」の字状に外反する口縁部がつき，a類の甕を小形にしたものである。胴部内面はヘラケズリ，外面は粗い刷毛目調整を行い，口縁部は外面は縦方向の刷毛目をヨコナデによって消し，内面は横方向の刷毛目調整を行っている。底部には5か所（内大きい部分3か所）の器壁の剝落部分があり，加熱の結果と推定される。なお，下胴部全体には煤の付着が認められ，頻繁に火にかけられていたと考えられる。

c類（91，92）　あまり外への張りが強くない胴部に，「く」の字状に折れて外反する口縁部を有するものである。91は，内面は頸部まで横方向のヘラケズリを行い，外面は縦方向の刷毛目，口縁部内面はヨコナデ調整を行い，全体に非常に丁寧なつくりである。92は，以上述べてきた土師器類よりもかなり時期の下がると考えられるものであり，ほとんど外に張り出さない胴部に，「く」の字状に折れて反り気味に外反する口縁部がつく。口唇外部は平坦につくっている。胴部内面はヨコナデ，胴部外面は縦方向の粗い刷毛目，口縁内面は横方向の粗い刷毛目による器面調整がみられる。

3　古墳時代須恵器

坏（93～102）

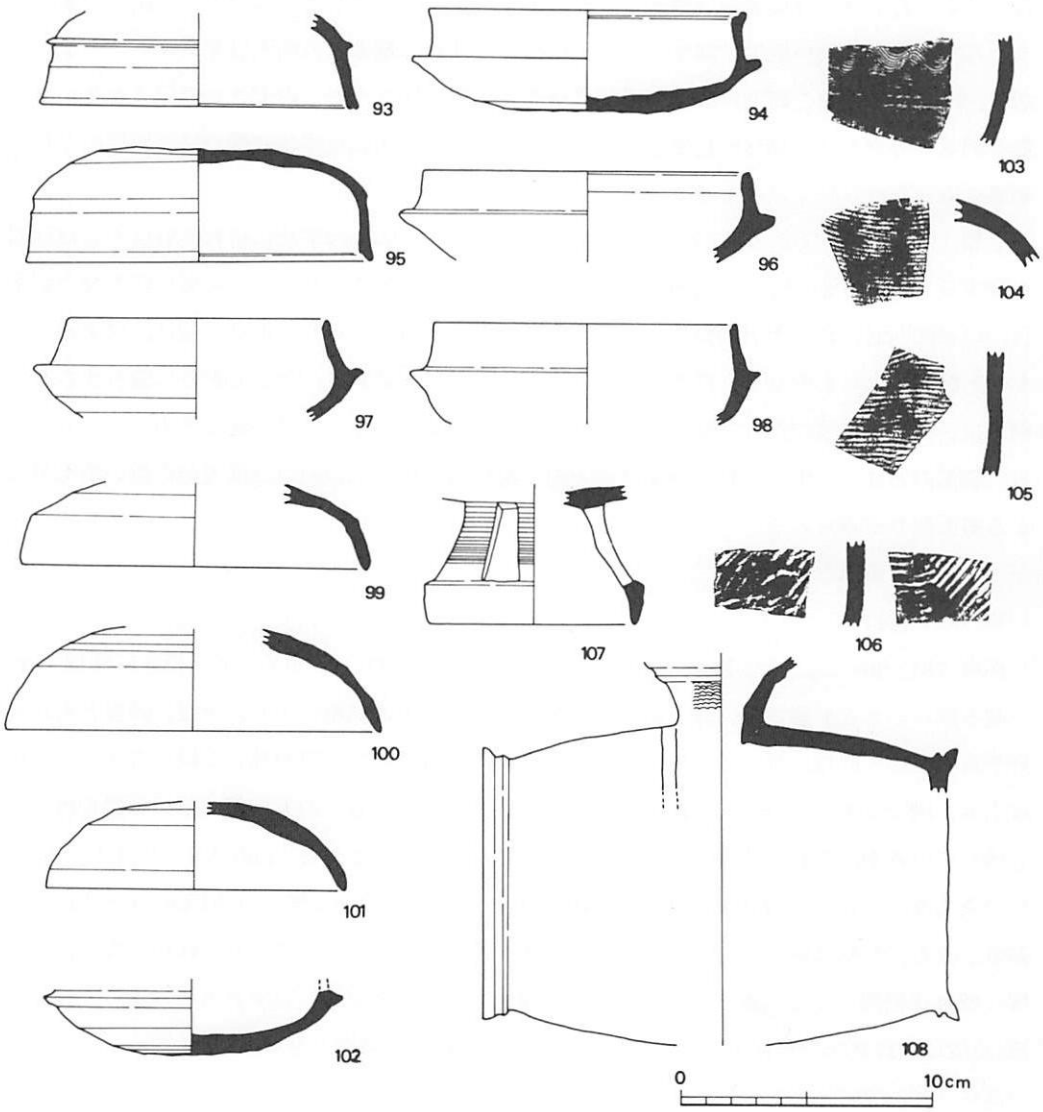
坏身（94，96～98，102，103）と，坏蓋（93，95，99～101）とがある。93は推定口径12.8cmを測る深みのある形態で，口縁上部に凸帯を有する。胎土は精緻であり，焼成，調整ともに良好である。95も同様，推定口径13.8cmを測る深みのある形態で，口唇部に1段を有するが，口縁上部の段は消失し，浅い凹線によりその痕跡をとどめている。99も口縁上部に痕跡程度に段を残しているが，これら2例に比べて身のつくりが浅くなっている。100，101は身全体が半球形に丸くなっており，口縁部も外開き気味につくっている。100は推定口径15cm，101は12cmを測る。なお，器壁は前述のものに比べやや厚味がある。96～98はいずれも小破片であり，器全体の概要は把握しがたいが，口縁部はやや内傾気味に立ち上がる。いずれも丁寧なつくりである。102は丸底気味の底部をしており，身のつくりは浅く，器壁も分厚い。

高坏（103，107）

107は，高坏脚部破片であり，底径は推定で8cmを測る。脚部には1段を有し。端部はやや内傾気味につくっている。外面にはカキ目調整痕が残り，脚内面はヨコナデ調整を行っており，つくりは丁寧である。台形状の透し孔がつくが，全体の数は不明である。103は小破片であるが，坏部の破片と推定できる。胴部に削り出し状の凸帯が1条めぐり，その上にクシ描きの波状文がめぐる。胎土は精緻であり，焼成，調整ともに良好である。

樽形𤮪（108）

器全体の約⅛程度を残す破片である。胴端部径は推定10.7cmを測り，やや丸味を帯びた胴部をしている。端部には2条の断面三角形状の凸帯がめぐり，頸部付近には2条の浅い沈線がめぐる。頸部は，別に整形したものを，胴部整形の後に挿入，貼り付けを行って形成しており，1条の断面三角形状の凸帯がめぐり，凸帯下には細かいクシ描きの波状文がめぐる。胎土は精



第21図　出土須恵器

緻，焼成は堅緻であり，全体に非常に丁寧なつくりである。

以上の他に，甕形土器や壺形土器などの体部破片がかなり出土している。103～106は，これらのうちかなり古い時期のものと考えられる須恵器の破片を示したものである。

4　土師質土器

埦（109～111）

109は，口径約16cm，高さ6cmを測り，口縁端部はやや外反する。底部には断面三角形状の貼付高台がつく。内底面にはヘラミガキ調整痕が残り，器外面はヨコナデ調整を行っている。110，111の高台は109よりも若干外へのふんばりが強くなるが，いずれも同一器形をとるものと考えられる。なお，これらの3点はいずれも黒色土器で，底部の切り離しはヘラ切りによっている。

高台坏（112～122）

坏部の大きさ，高台の形態から，3種類に分類することができる。

a類（112，113，116，118～122）　径14cm程度の皿状の坏部に，強く外側へふんばる高さ2cm程度の高く大きい貼付高台のつくものである。底部の切り離しはヘラ切りによっており，器体内外面はヨコナデ調整を行っている。なお，全体の器形は知り得ないが，112，113は埦形に近い身の深い坏部がつく可能性もある。

b類（115，117）　坏部径10cm程度で，a類の高台坏を小さくしたものである。115は，径10cmの皿状の坏部に，径6.5cmの断面三角形状の貼付高台がついている。高台の外側へのふんばりはa類ほど強くはない。器体内外面はヨコナデ調整を行い，全体のつくりは丁寧である。

c類（114）　皿状の坏部に，断面三角形状の低い高台のつくものである。114は，口径13cmを測る皿状の坏部に，断面台形状に近い低い貼付高台がついている。全体のつくりは丁寧である。

坏（123～129）

a類（123～125）　底部がやや丸味を滞びた椀形に近い器形をとるものである。125は，口径12cm，高さ3.4cmを測り，やや内湾気味に立ち上がる器壁をもつ。123，124は口径10cm程度のやや小形のものである。磨滅のため不明瞭なものもあるが，底部の切り離しはヘラ切りによっていると推定される。

b類（126～128）　平坦な底部に，器壁が直線的に強く外側へ開く器形をとるものである。底部は外反気味にやや外側へ開き，128の例のように明瞭な角度をもつものもある。a類同様126のように大形のものと，127，128のように小形のものの2種類がある。底部にはいずれもヘラ切り痕を残す。

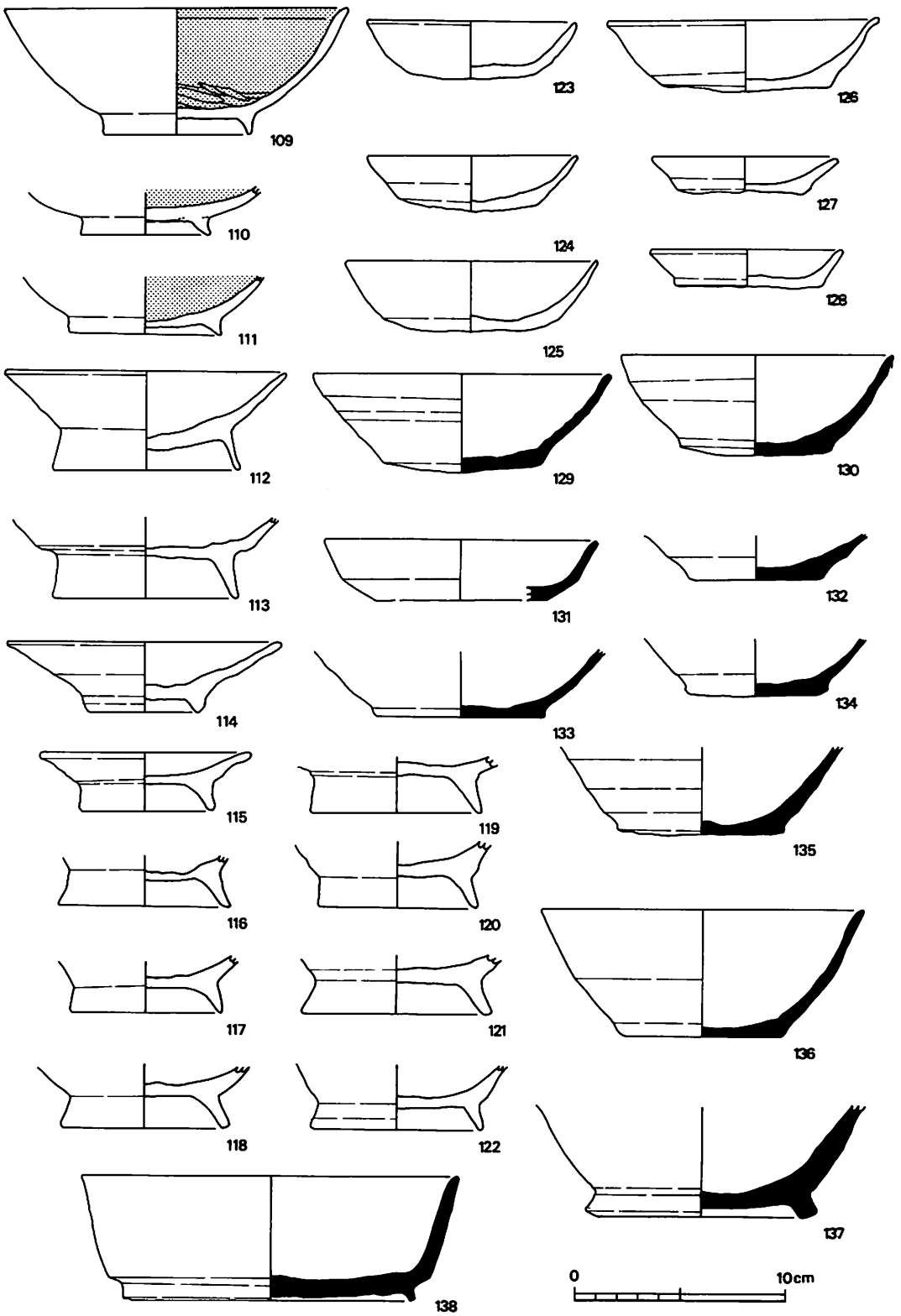
5　須恵器

坏a類（129～136）

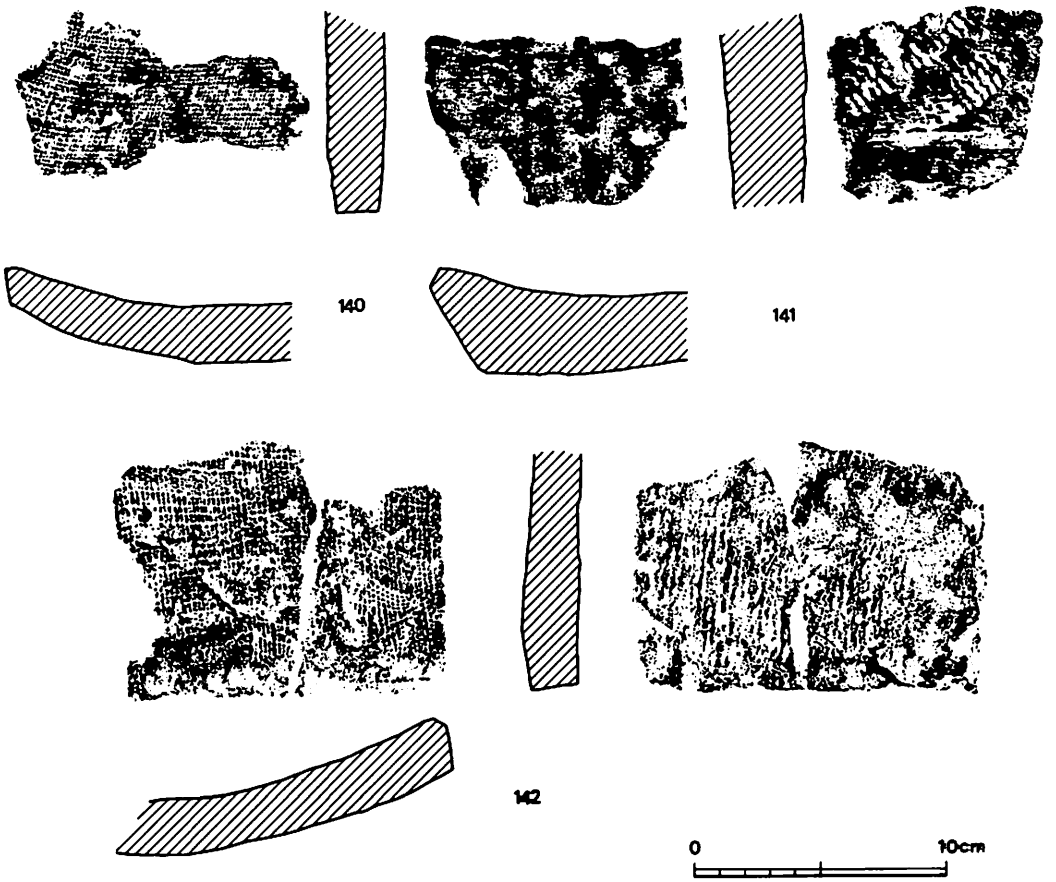
口径14～15cm程度で，ほぼ平坦な底部から器壁が直線的に強く外側へ開く器形をとるものであり，130，133のように底部外面に高台を意識した削り出しのみられる例もある。131は，器高も低く，底部も張り出しはみられず皿に近い形態をしている。

坏b類（138）高台付のもの

138は，口径18cm，高さ5.9cmを測り，器壁は底部から垂直気味にゆるく外反し，小さな断面



第22図　出土土師質土器，須恵器



第23図　出土瓦

台形状の高台がやや外側へふんばり気味につく。底部はヘラ切りの後にナデ調整を行っている。全体に非常に丁寧なつくりである。

その他，137は高台付の須恵器底部である。全体がどのような形状になるか不明であるが，器壁が厚いことなどから壺形土器底部の破片と考えられる。断面方形の貼付高台は，かなり外側へふんばっている。器体内外面はヨコナデ，内底面はナデ調整を行っており，かなり丁寧なつくりである。

6　瓦（140～142）

平瓦の破片である。140，142は厚さ2cm程度でやや薄手のつくり，141は中央部で2.5cm，端部で4cmとやや厚手のつくりである。いずれも表面には布目，裏面には側縁に斜行あるいは平行の縄目が施される。

7　瓦質土器

骨蔵器（139）

須恵器系の瓦質土器であり，胴部最大径29cm，底部径15.8cmを測る。灰色を呈し，胎土は精良，焼成はやや脆弱である。高台は貼付であり，断面方形のものがかなり外側へふんばり気味につく。器外面の調整は非常に丁寧である。全体の形状は不明であるが，肩部の張り出し具合などから短頸の壺形土器になり，おそらく骨蔵器の一種と推定される。

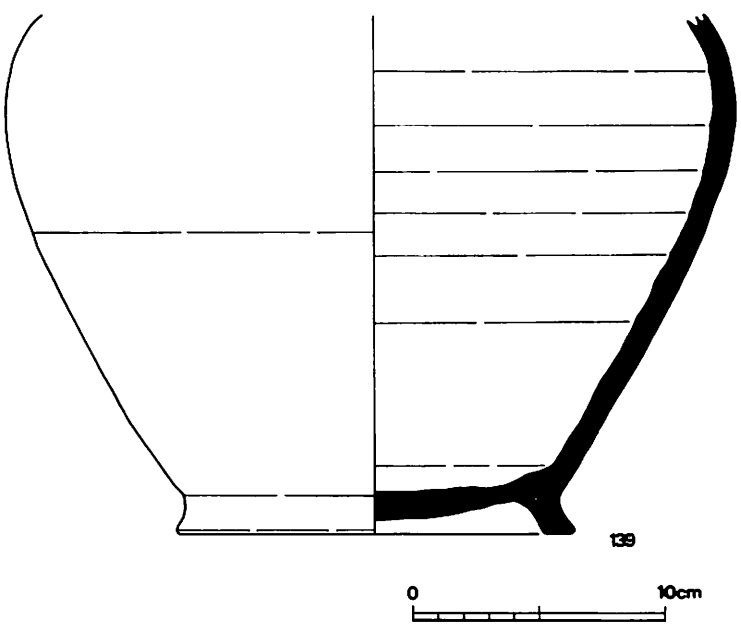
8　石器

いずれも弥生時代のものであり，太型蛤刃石斧１点，石庖丁２点，敲石１点の計４点がある。

石斧（２）　太型蛤刃石斧の破損品である。重さ497gを測り，胴部は６×4.5cmを測る楕円形を呈しており，基部はやや先細り気味になる。研磨調整は非常に良好である。使用によって破損したものと考えられ，800g程度の重量の石斧であろう。

石庖丁（３，４）　３は長軸9.5cm，短軸3.5cm，厚さ0.5cm，重さ41gを測る緑泥片岩製の磨製石庖丁である。全体の形状は長方形に近く，刃は両刃，中央部に両面穿孔による孔が一孔穿たれている。研磨調整は良好である。なお，背部に鋸歯状の調整痕が認められる。４は長軸8.5cm，短軸3.5cm，厚さ１cm，重さ42gを測る粘板岩製の打製石庖丁である。全体の形状は３同様長方形に近いが，一端に打ち欠きによる抉り込みがある。刃部には細かい剝離が全面に認められる。背部には鋸歯状の調整痕が残るが，両端は研磨が施されている。なお，表面には一部横方向の研磨が行われている。

敲石（１）　花崗岩製の敲石と考えられるものである。長さ14cm，径約６cmのほぼ円形の胴部をしている。表面は滑らかであり，一端に敲打痕が残る。

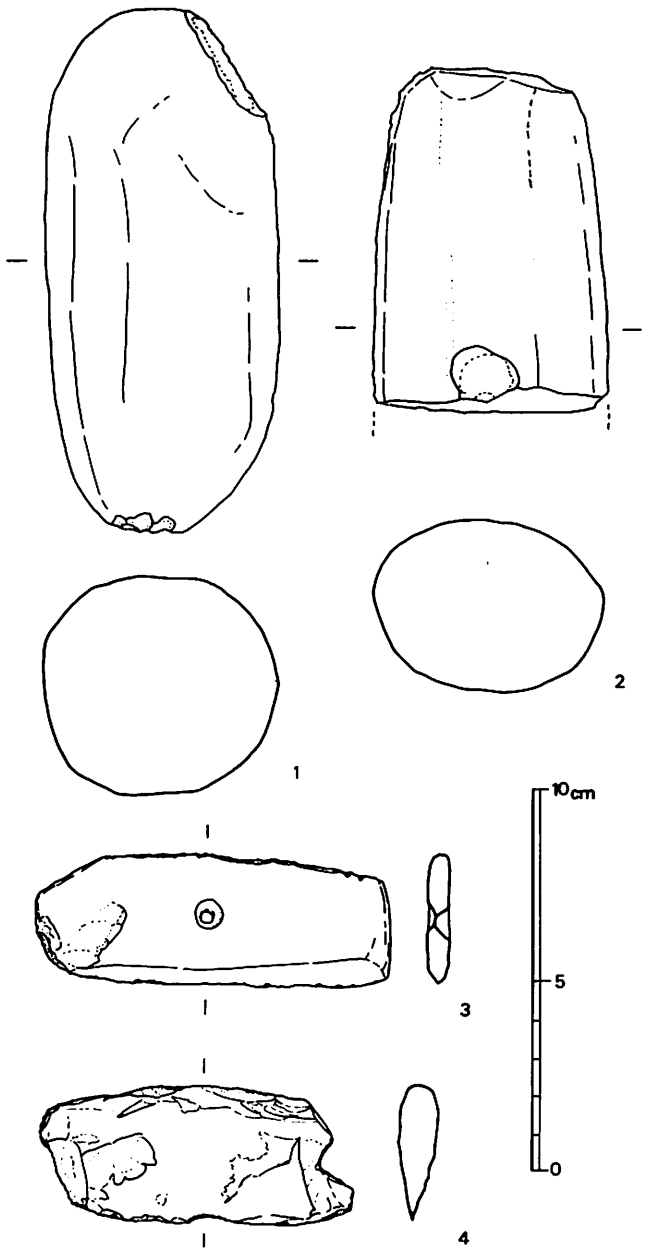


第24図　出土瓦質土器

9　木製品

杭（１～５）

２のように径５cm程度のやゝ太いものと，１，３～５のように径３cm程



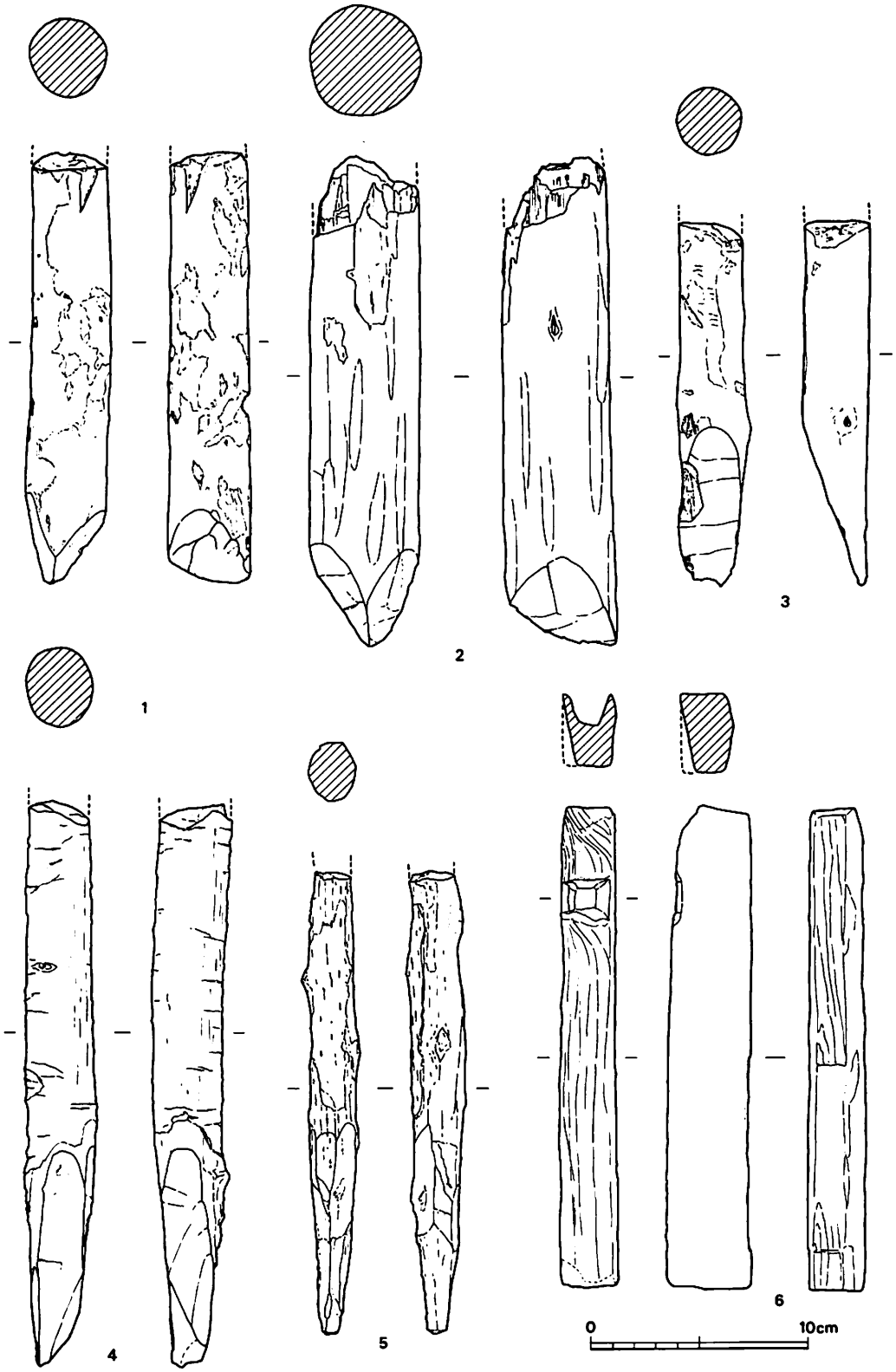
第25図　出土石器

度の細いものの２種類がある。また先端部のつくりは，１，２のように両面から削り落したものと，３のように片面からのみのもの，あるいは５のように周辺部数か所から削り落してゆくものがある。１～３は樹皮をある程度除去しているが，４，５は樹皮を残している。いずれの杭も先端部は破損により欠失している。

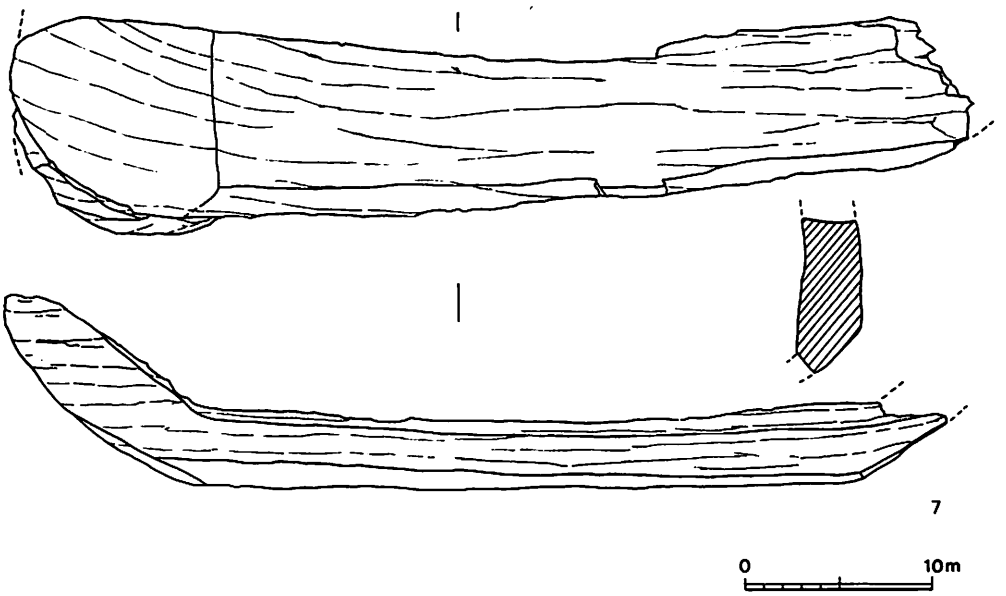
枘穴を有する木片（６）

幅４cm，長さ22cm，厚さ2.5cmを測る長方形の木製品である。柾目を利用して木取を行っており，表面はかなり平滑につくられている。一端に２×２cm，深さ1.5cmを測る枘穴が穿たれている。用途は不明である。

槽（７）　長さ50cm，幅10cm程度を測る槽の破損品である。厚さ３cm程度で両端はやや厚い。底部裏面はやや丸みをもった平坦面に削り出し，一部は樹皮をはいだままの面も残している。木口の下部は内方にむけて斜めに削っており，下面は船底形を呈している。器の内面は平滑にととのえられているが，使用によりかなり磨滅しており，調整痕は不明である。なお発掘調査終了後，堤防部分の工事中に当木製品と接合すると考えられる木製品が出土し，現在神辺町教育委員会で保管されているが，その破損品などの形状から槽と推定した。



第26図　出土木器 1



第27図　出土木器 2

V まとめ

今回の発掘調査では，検出された遺構が井戸跡一基のみということで，渡瀬遺跡全体の性格を論ずるまでには至らないが，以下出土土器の年代的な位置づけに関して概要を述べ，まとめにかえたい。

弥生時代

まず中期後半のものとして，壺形土器では1，2，高坏では38，39，52，器台形土器では53～55などの土器が該当しよう。壺形土器では口縁外部の凹線もしっかりしており，2では口縁端部の下方への張り出しも大きく，鋭い。高坏ではくびれ部も明瞭，器面調整も非常に丁寧で，全体にシャープなつくりをしている。また器台形土器では，器外面に幅が広く，浅い凹線が数多くめぐっている。38，39の高坏は，岡山県内での上東・鬼川市0式期[(1)]に併行する時期のものであろう。

後期の土器は，備後地方では良好な一括資料に恵まれていないため，充分な編年的成果は上がっておらず，時期的な分類を行うことが困難な側面もあるが，壺形土器では，3～7，25のように中期後半の形態を引きつぎ，口縁端部が上下に張り出す口縁部をもつものは前半期に，26のように口縁端部がやや立ち上がり気味になるものは中頃に，18，19のように複合口縁状の口縁部をもつものは後半期にそれぞれ比定することができよう。胎土，焼成，色調や器形などから，岡山方面からの搬入品と考えられる22，23の土器は，頸部がほとんどくびれず滑らか

に胴部へ移行しており，上東・鬼川市Ⅲ式期[2]に併行する時期のものと考えられる。また27の壺形土器は，胴部が球形に近く，底部も小さく叩き目調整を行っていることなどの特徴から，終末期に比定できよう。高坏では，40，42のように中期後半期の器形を受け継ぎ，口縁部が比較的短く折れるものは古く，43のようにやや長くなるものから，新しくなると47，48のように長く外側へ外反するものへという変化の過程が型式的にたどれるが，こうした変化が時間的な変遷過程とはたして相応するかどうかは，今後の資料的な増加を待って再検討したい。なお，64の舟形の鉢形土器は，島根県邑智郡瑞穂町順庵原遺跡から4脚を有する舟形鉢の土器[3]が出土しており，祭祀品としての可能性を裏付けることができよう。当遺跡の舟形鉢形土器の時期に関しては全く不明であるが，出土地点が6b区のかなり下層の部分であること，周辺部からは弥生後期の土器が多く出土していることと，前述のように弥生時代の舟形鉢形木器との関連などから弥生時代後期のものと考えておきたい。

古墳時代

古式土師器には，75のようにほぼ球形の胴部がつき，外反する口縁部外側に段がつきいくぶん内傾気味になるような土器は，古相を示しており，近畿地方の布留Ⅰ式期に併行する時期のものと考えられる。76～80の土器は，75の土器に比べ器壁がいくぶん厚く，若干作りが雑な面もあるが，ほぼ同時期のものと考えておきたい。一方，84のように卵形に長くのびた胴部に外反する胴部がつく甕類は，75の土器類よりも時期的に下がるものと考えられる。

須恵器は，93～98，103～108のものがかなり古い様相を示しており，5世紀後半代の実年代を与えることができる。なかでも，93の坏蓋，108の樽形瓶は他のものと胎土，焼成とも異なりいくぶん時期的に溯るものといえよう。その他，99の坏蓋は6世紀前半代に，100～102の坏は，6世紀中葉～後半代にかけてのものである。

奈良時代

138の須恵器坏と92の土師質土器があげられる。92に関しては類例に乏しく正確な実年代を与えがたいが，138の坏は奈良時代前半期のものと考えられる。なお，139の骨蔵器と考えられる須恵器系の瓦質土器は，全体の器形は不明であるが，高台のつくりなど福岡県鞍手郡若宮町の汐井掛遺跡の第1，5号墳墓出土の骨蔵器[4]に類似しており，奈良時代から平安時代の前半期頃のものと推定できる。

平安時代

109～136までの土師質土器，須恵器坏類が上げられる。遺構からの一括出土遺物でないため，時期的に前後関係があるのかどうかは現状では判断がつかないが，ほぼ同時期に属するものと一応考えておきたい。器種としては，109のような黒色土器の椀と，112のような高台坏，125，126のような坏類と，136のような須恵器坏類が一つのセット関係をなすと考えられる。備後地方でもこうした土器群は，福山市津之郷町ザブ遺跡や，同じく福山市大門八幡神社遺跡などから出土している。いまここでこの種の土器群に対してその実年代を正確に論ずる資料は持ち合

わせていないが，ザブ遺跡出土の一括遺物が11世紀代[5]，大門八幡神社遺跡出土のものが11～12世紀頃[6]に比定されており，当遺跡出土土器群も大門八幡神社遺跡出土土器に近似していることから，平安時代後半期―11～12世紀代のものと考えることができよう。

以上述べてきたように，今回発掘調査を実施した渡瀬遺跡からは遺構そのものの検出はみられなかったものの，弥生時代中期後半から古墳時代，奈良時代，平安時代と各時代の遺物が出土しており，当遺跡周辺部においてかなり長期に亘って人々が生活をしていた状況を把握することができる。そのことは，古代山陽道が渡瀬遺跡の近辺を通っていたと推定されていることからもうなづけよう。なお，昭和55年度に神辺町教育委員会が調査を実施した下流の地域からは，弥生時代中期から後期の前半段階にかけての土器が大部分を占め，今回の発掘調査においても，下流の部分は弥生時代，古墳時代の土器が大部分を占め，平安時代の土器は上流域から出土するという傾向が把握できた。出土土器に関しては，県内においてまだいずれの時期のものに関しても編年的な研究が進んでいない現在，個々の土器の正確な年代的位置づけに関してはあえて避けた。しかしながら，渡瀬遺跡から出土したこれらの豊富な土器群は，将来備後地域において各時代の土器の編年的研究が進められる過程で，必ずその欠を補う資料になるであろうと確信している。

今回の発掘調査は，背後の丘陵部まで含めて広がっている渡瀬遺跡のごく一部分に対して行われたのみで，遺跡全体の性格を把握するまでには至らなかったが，過去にくり返し起ったであろう六反田川の氾濫によって堆積したこれら豊富な遺物の存在から，背後に広がる水田地帯や丘陵部には大集落の存在が推定される。

註

（1） 岡山県教育委員会『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16　川入・上東』　1977年

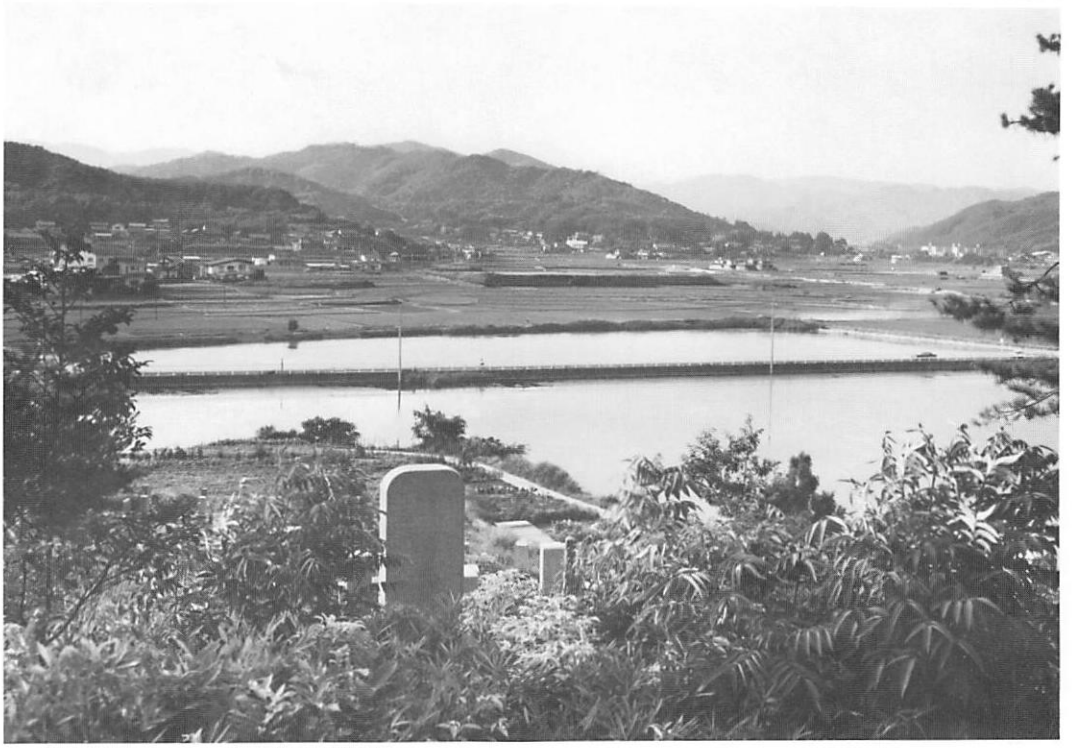
（2） 前掲註（1）に同じ

（3） 八雲立つ風土記の丘資料館『古代の石見』　1978年

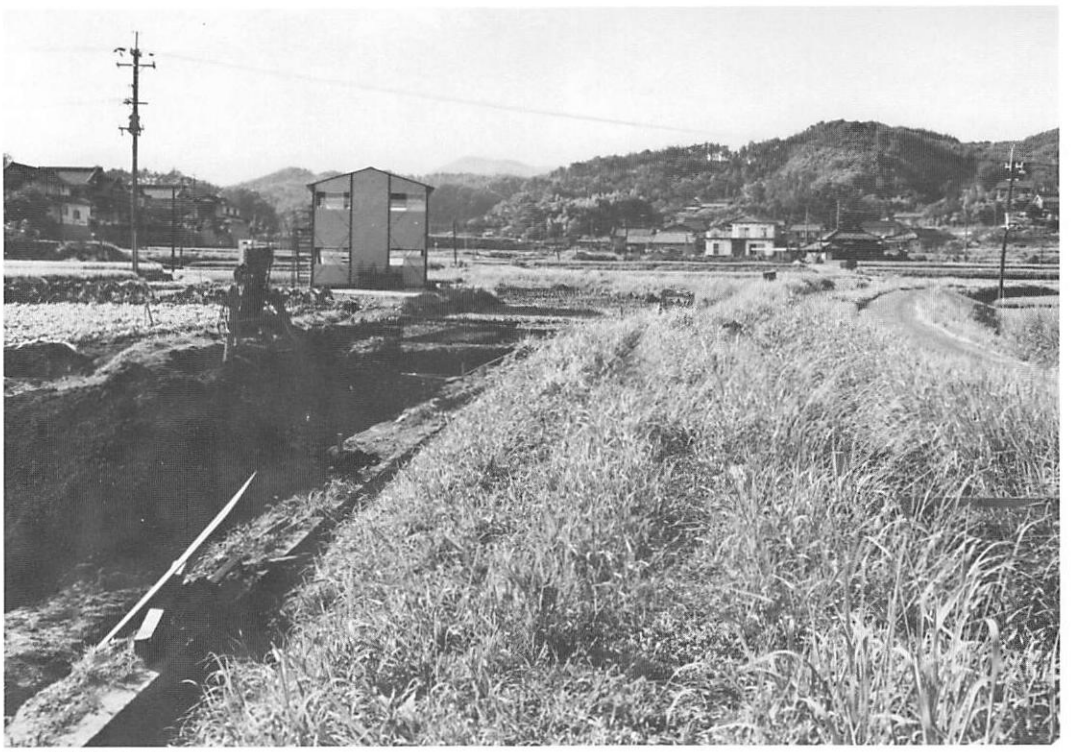
（4） 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ＸＸ』　1978年

（5） 広島県教育委員会「ザブ遺跡」『山陽新幹線建設地内遺跡発掘調査報告』1973年

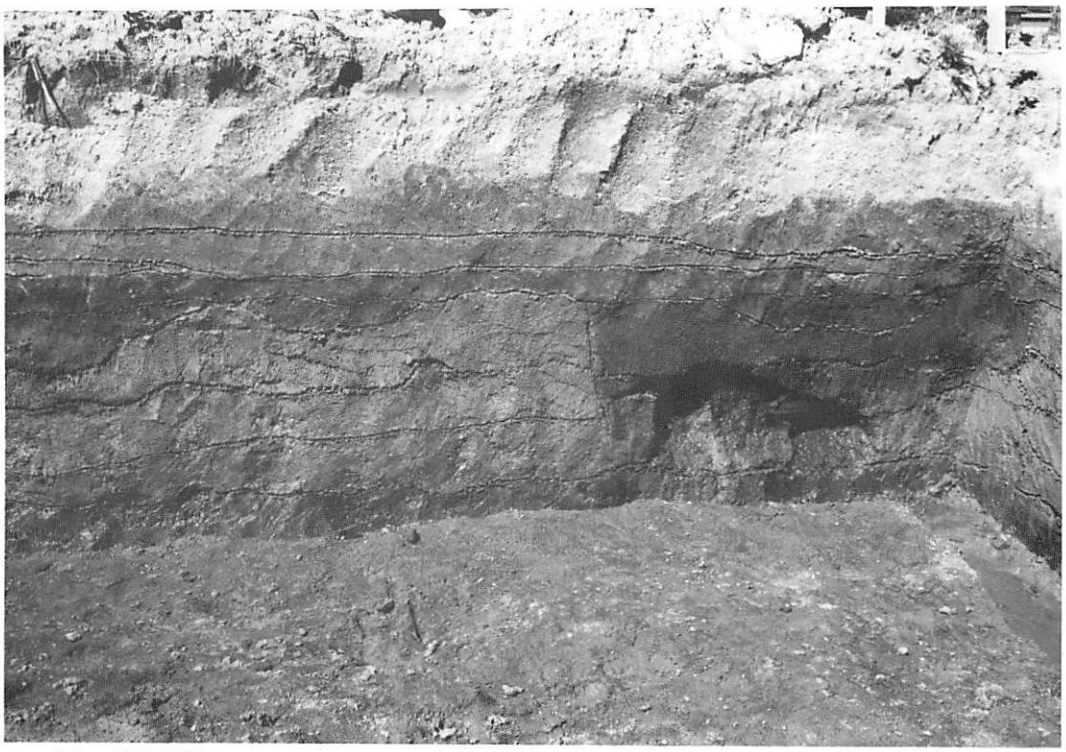
（6） 志道和直「平安時代の土器生産Ⅱ」『草戸千軒No45』　草戸千軒町遺跡調査研究所　1977年



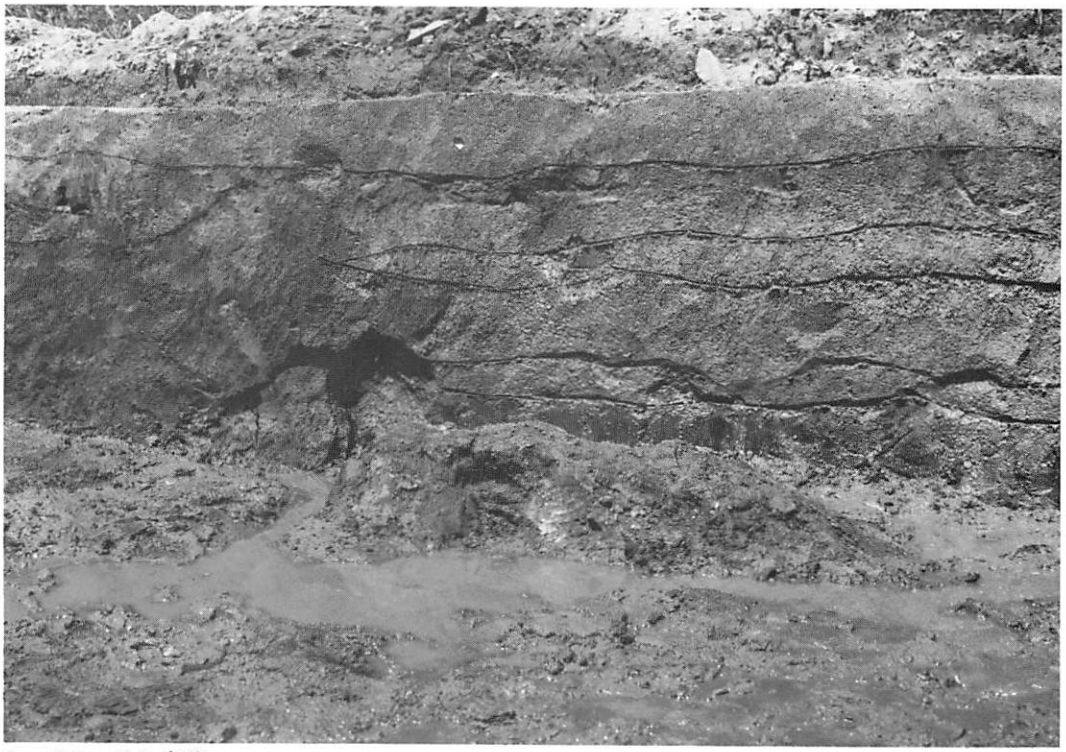
a　亀山遺跡よりみた渡瀬遺跡（遠景）



b　渡瀬遺跡（近景）



a　2 b，3 b 西壁



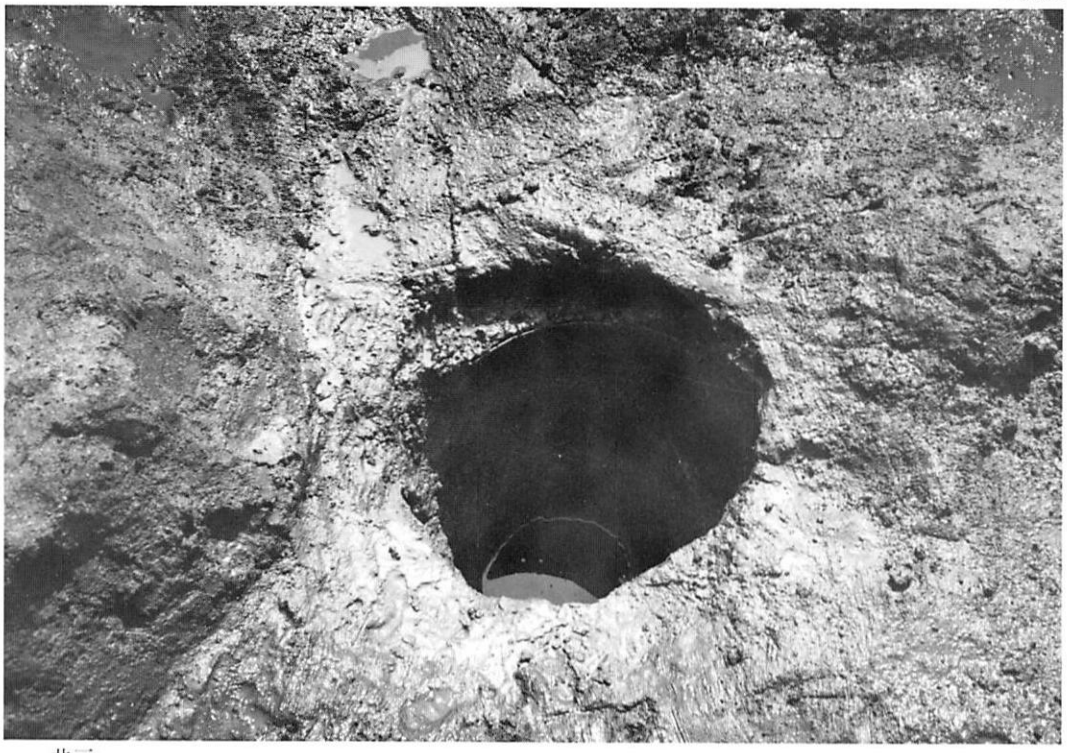
b　6 b，7 b 東壁

a　8 b，9 b 西壁

b　12 b，13 b 西壁

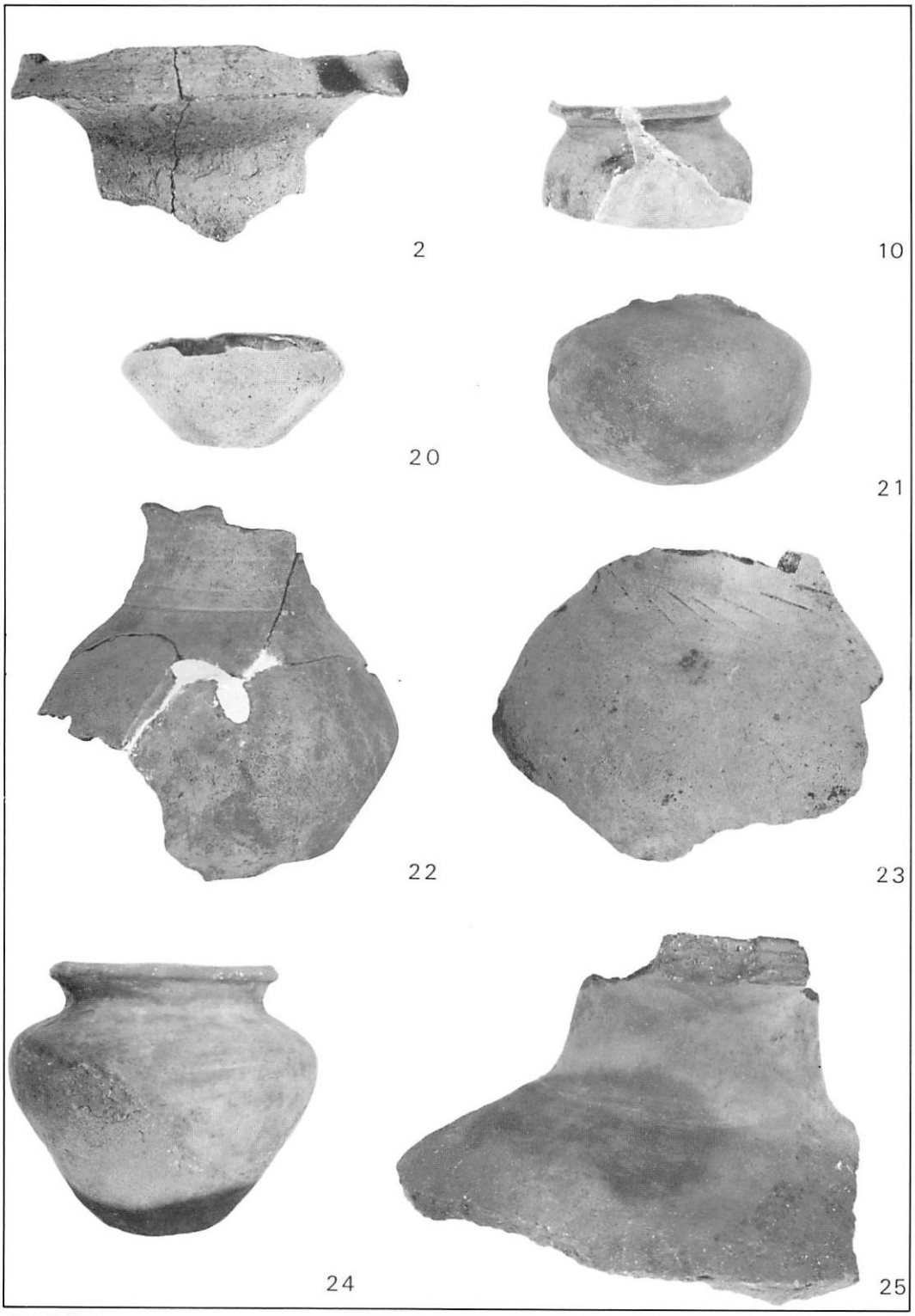
a　10 b ～13 b 区

b 遺物出土状況

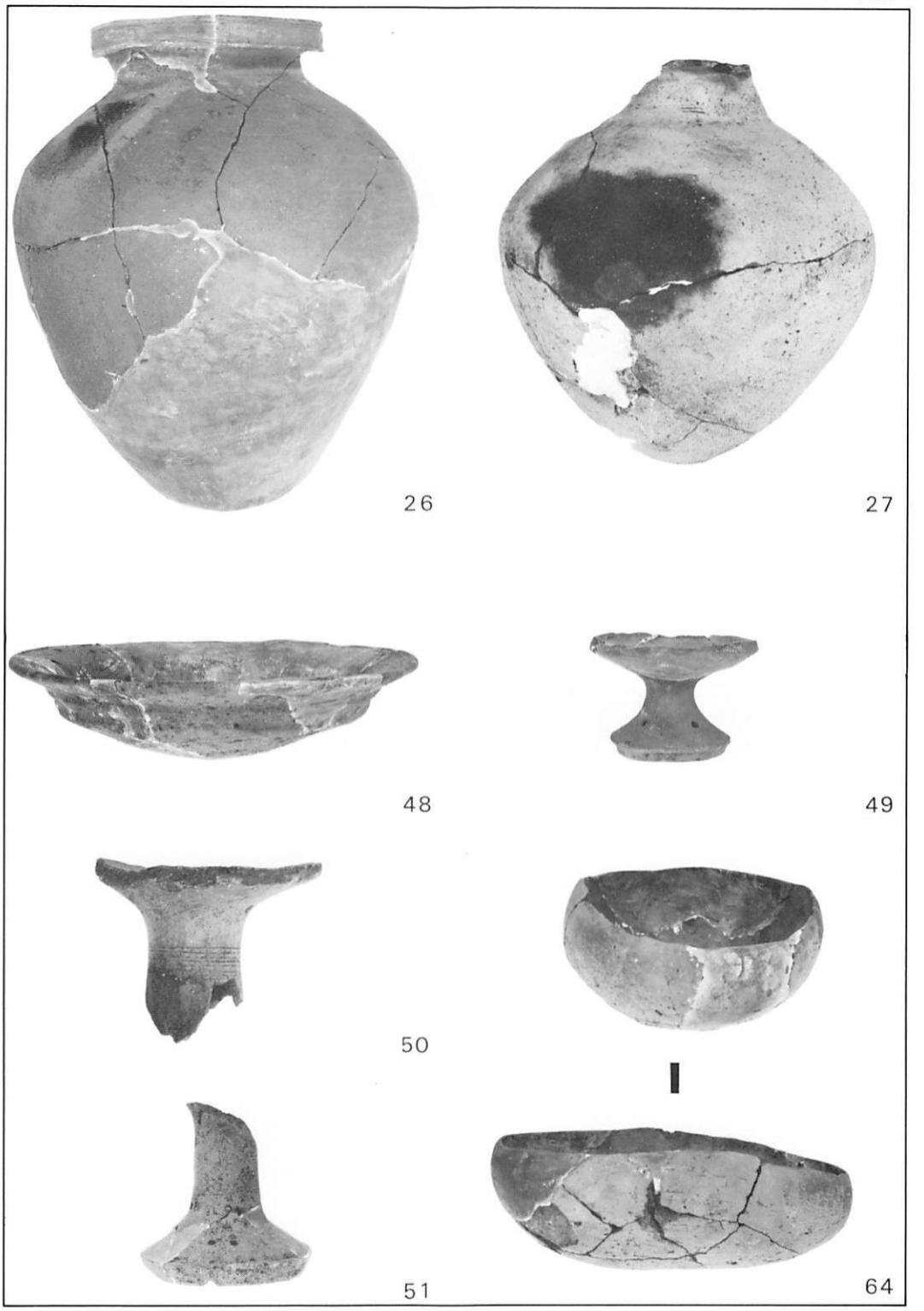


a　井戸

b　遺物出土状況



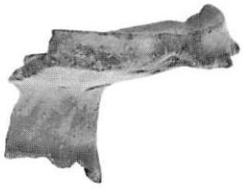
出土遺物 1



出土遺物 2

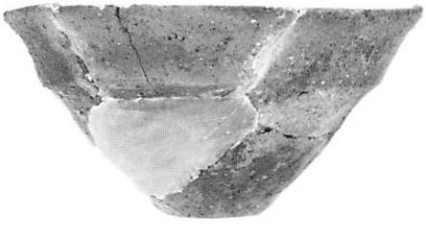
39

60



61

62



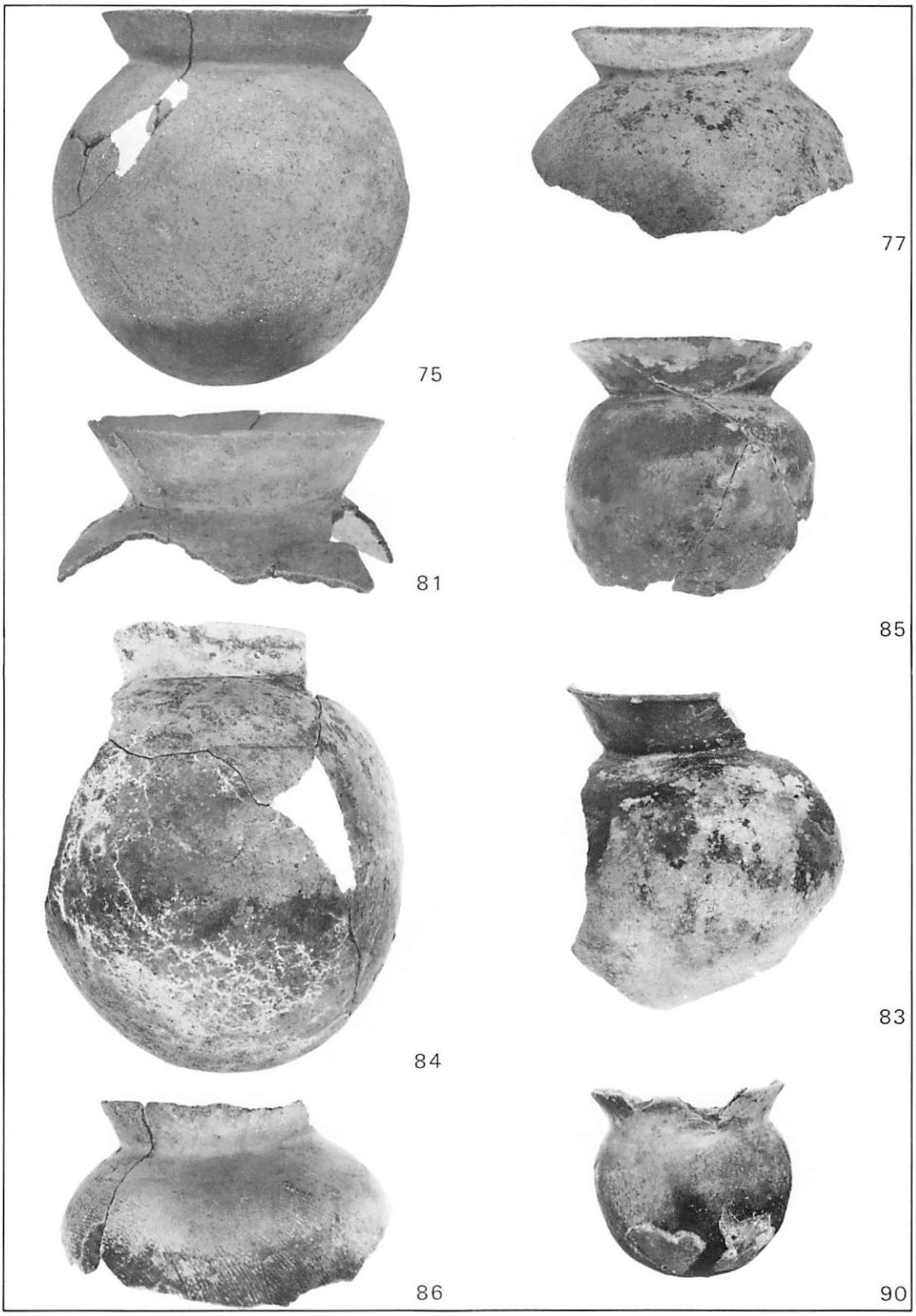
63

65

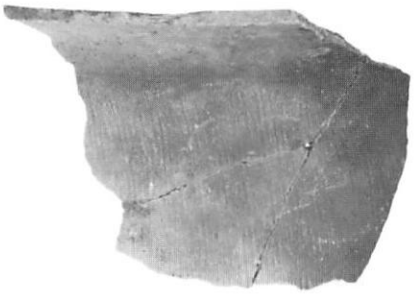
69

70

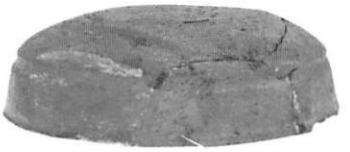
出土遺物 3



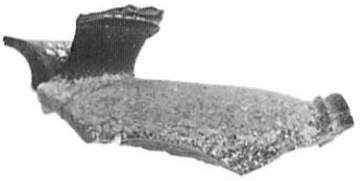
出土遺物 4



92

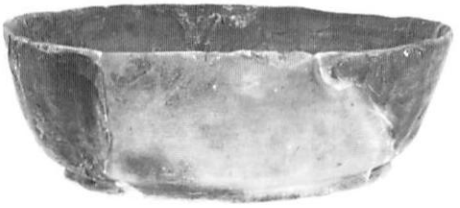


95



108

137



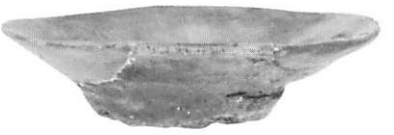
138

109

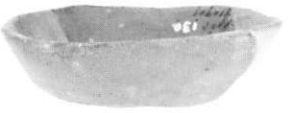
139

出土遺物5

112

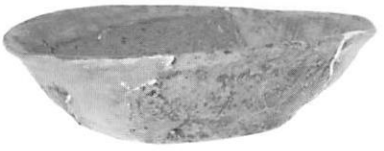


114



123

124

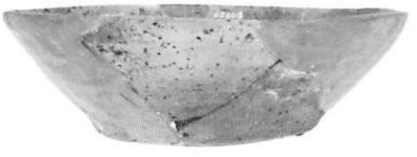


126

125

127

128



129

130

出土遺物６

１９８２年３月

渡　瀬　遺　跡

編集・発行　広島県教育委員会
（財）広島県埋蔵文化財調査センター

印　　刷　大村印刷株式会社